

郷土補充讀本



特218

158



始



昭和九年二月



郷土館
補充讀本



大分市南大分尋常小學校編

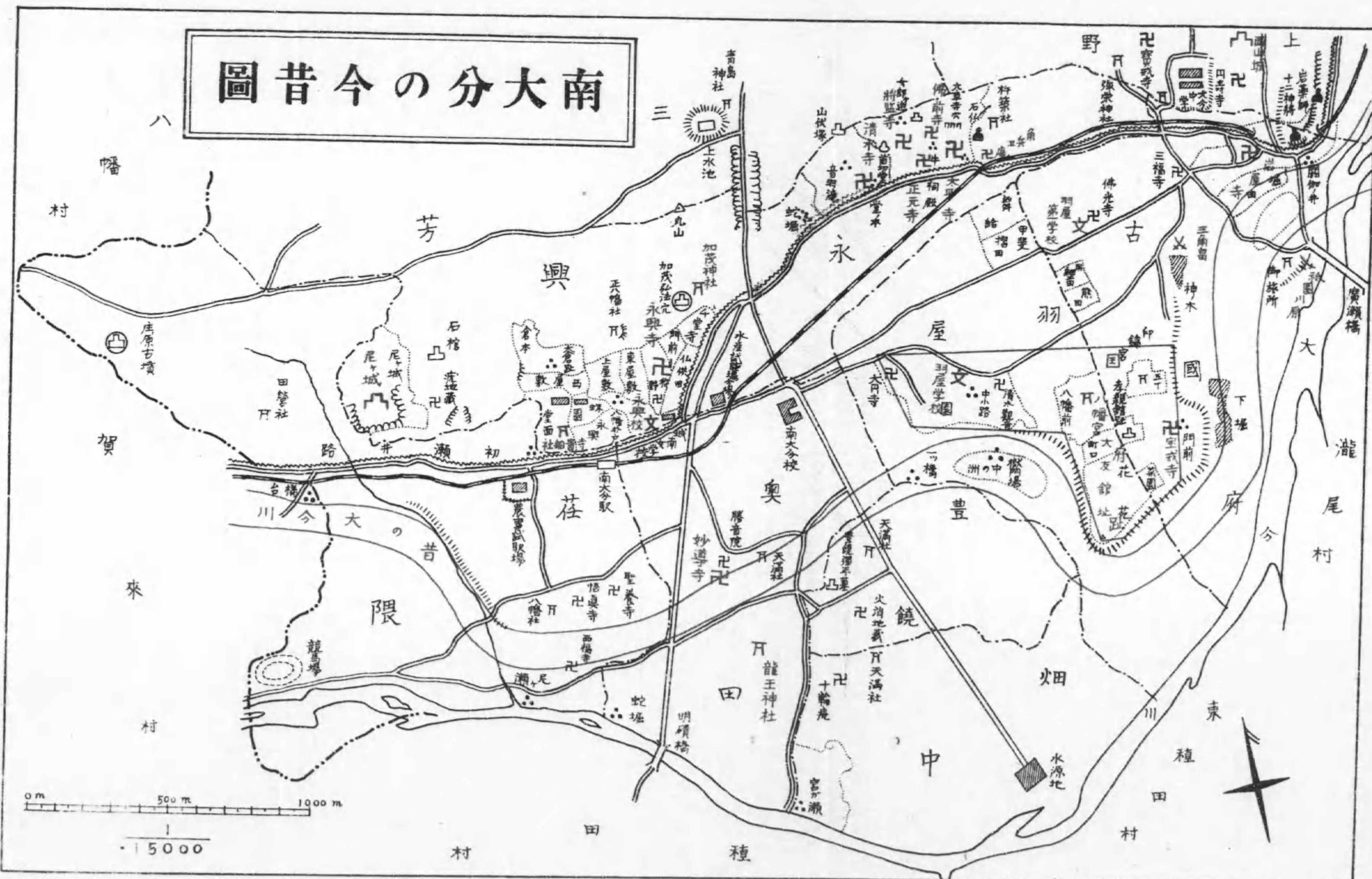
南天行



天



南大分の今昔圖



はしき

我等の郷土南大分は昔から歴史・傳説・古蹟に富んでゐたが今では大方はなくなり、之を知つてゐる人も少くなつた。これは非常に残念な事である。

それで本校開校六十周年の記念事業の一つとして古蹟を研究し、併せて現在の有様及び將來の嚮ふ所など調査研究して皆さんの補充讀本としてまとめこゝに刊行することとした。

資料としては古い本は勿論、舊家や古老の口碑ものこらず集め、むづかしい考證をさけ、文章も三四年生の程度とした。

郷土を知つて之を愛し益々發展させるは我等の務である。

皆さんはこの本をくりかへして讀んでなつかしい我等の郷土がかくも美しい歴史に富み、尙將來も大いに發展する事を知つて愈々愛郷の情を養つていただきたい。

皇緒殿下御降誕第一紀元節の佳節に當りて

學校長 高崎吉人

一、南大分の歴史	一
二、南大分の古墳	五
三、金の鶏	四
四、私共の學校	七
五、郷土の地理	三
六、國司時代の古國府	三
七、大友時代の古國府	六
八、元寇と大友頼泰・貞親	三
九、水源地	三
一〇、永興寺釋迦堂	四
一一、明磧橋	四
一二、農事試驗場	五
一三、大平寺の遺跡	五
一四、印鑰様	四
一五、大分川の今昔	六
一六、初瀬井路	六
一七、地藏傳説	六

一八、若杉直綱	六
一九、岩屋寺	七
二〇、十二神將	七
二一、龍ヶ鼻傳説	八
二二、交通	八
二三、三角畑の變	八
二四、彌榮神社	九
二五、疣地藏と尼城	九
二六、水産試驗場養魚池	一〇
二七、面白い風習	一〇
二八、丸山	一〇
二九、金剛寶戒寺	一〇
三〇、南大分の近郊	一〇
三一、南大分の將來	一一
三二、郷土の融和	一一

表紙 往時の永興寺棟瓦高麗狗及丸瓦

一、南大分の歴史

私共の郷土、大分の名は今から千九百年の昔、景行天皇が熊襲御征伐のため此地へ行幸遊ばされた時、地形を御覽になられた。廣大なるかな此の郷や宜しく碩田と名づくべしと仰せられた。ここによつて呼ばれるやうになつたのである。

大化の新政の後、日本全國に六十八個所の國府が設けられた。國司が其の國を治めるやうになつた。我が豊後の國府は聖武天皇の天平十五年、今の古國府の地に置かれたもので、外從五位下陽侯史眞躬が豊後守として任ぜられたのを以て、始としてゐる。それから建久七年、大友能直が豊前豊後の守護職になる迄、四

百五十年の間三十數代の國司が代々この地に居て政治を行つてゐたのである。

其の當時の我が南大分の地は、古國府を中心として大變繁盛を極めてゐたこと、思はれるが、くわしい記録に乏しいことは實に残念なことだ。大友氏は入國以來舊國府の趾に、廣大な御殿を造つて移り住んでゐた、之が大友屋形である。其の後、居を上野西山城に移すまで代々此の館にゐたので、古國府は相變らず文化の中心であり市街の賑やかさは國司時代に數倍してゐたのである。

四百年の輝かしい歴史のある大友氏も第二十二代義統の時になつてさうく絶えてしまつて、其の跡に府内の城主として早川長敏、福原直高、竹中重隆、日根野吉明、と相ついで任ぜられた。

現在の縣廳のある所は福原直高の築城した荷揚城の趾で、今から三百年前慶長四年に出來たものである。

かうして藩政の中心が山北部に移つてからは我が南大分の地も、何時かはなしに再びもこの農村になつてしまつた。

古い頃の地名は明でないが二百四十年前の記録の中に、古國府、羽屋、豐饒畑、中、永興、大平寺、田中、尼ヶ瀬、奥小路、上村、竹ノ上、の名稱を見出すことが出來るから之等の各村は早くから發達してゐたものと思はれる。そして其の當時南大分一帯は荏隈郷と呼ばれてゐたのである。

明治六年三月小區制が定められて大分郡を二十六小區に分けたとき、古國府村、羽屋村、豐饒村、畑中村、奥田村、荏隈村、永興村は皆第三小區に屬する様になつた。十一年には三芳村が十五年に

は上野村が加はり、十七年には行政上の改正があつて永興村、古國府村に分れたのである。

明治二十二年四月から町村制が實施せられて永興村は荏隈村、古國府村は豊府村と改稱された。荏隈村には荏隈、永興、奥田、三芳の各村が之に屬し、豊府村には古國府、上野、羽屋、畑中、豊饒の各村が屬してゐた。こゝは永興村、古國府村の時と同じであつた。この時始めて村役場を置かれたが、荏隈村役場は永興に、豊府村役場は古國府に出來たのである。

明治四十年四月後日市制を施行し得る基を定めるため、二村は西大分町と共に大分町に合併されて大大分町となつたのである。之から山南部一帯の地を南大分と呼ぶ様になつた。明治四十四年四月一日、待ち望んでゐた市制が愈々施行され

て以來、年を経ること既に二十幾年、以て今日に及んだのである。

二、南大分の古墳

古墳とは一口に言へば古いお墓の事です。土を高く盛り上げて小山の様にしてお墓で、何時頃出來たかと言ふと、神武天皇の頃から奈良時代までの間で、我が國で古墳を造る事の一番盛であつた時代は、仁徳天皇の御代だと言ひ傳へられてゐます。それで千二百年も二千年も前に出來たものです。その時代は我々の祖先のお墓も御陵墓の様に高く土を盛つたお墓であつたので、それが我が國に佛教が傳つて來て、葬式の時に火葬する様になつてからはだん／＼すたり、高貴のお方以外は、その習が止み

ました。

古墳の封土(墳丘)も言ひ土を盛つたもの(の形は色々ありますが、大別しますと第四圖の様に圓形墳と言つて圓いもの、前方後圓墳(又は瓢形墳)と言つて瓢をたてに切つて之を地上に置いた様な形をしたもの、四角な形をしたものがあります。そして其の古墳の周は渥水(あつみ)をためて堀の様にしたものであるのが多いのです。

古墳の中は死体を入れる石棺だけのものあれば、石槨と言ふ石のわくでかこんだ玄室の中に石棺を入れ、玄室に外から出入するのために道(羨道)をこしらへてあるものもあります。そして死体を腐らせぬために朱肉(しゆにく)印(いん)をおす時に使ふにくを石棺の内側へ入れてあるのが普通です。今でも石棺の内側の赤いのは、その朱が

残つてゐるのです。又死体のほかに飲食器、武器、馬具、鏡、玉などを入れて葬つてあるのが普通で、こんな物によつてその時代の人が、どんな物を使つて生活してゐたか、わかつて、學者が研究するのに大へん参考になるのです。

南大分の山地(山部)即ち大平寺から永興庄の原にかけての南側には古墳が澤山造られてゐたさうですが、それを知らずに掘つたので、今残つてゐるのは、極く少なくなつてしまひました。

では南大分に何故古墳が多かつたかと言ふと、南大分は今でこそ郊外(がうがい)の様になつて町の中心(ちゆうしん)は山北部(さんほくぶ)になりましたが、古く王朝時代(わうてい)はこの南大分の土地に豊後の國司廳(ぶんごのくにしりやう)國司(くにし)は天皇の御命令(ごめいれい)で地方(ちほう)に來てその地(ち)を治める役人(やくにん)で、國司廳(くにしりやう)はその役所(やくじよ)の事(こと)ですがあつて、豊後の中心地(ちゆうしんち)はこの南大分にこそあつたの

です。そして南の方には大分川を控へ、南向で日當りも良く住みよいところであつたので、澤山の人々が住んでゐたのです。それでこの山の南側には古墳が多いのです。

では南大分にある古墳について、今少し詳しく申し上げます。

永興の古墳

永興は特に古墳が多かつた。傳へられてゐますが、永興が永興石の産地であることから、その古墳の石槨又は石棺の石は大抵掘り出されて、道路、橋石垣、その他の事に使はれ、特に佐藤酒屋の前の初瀬井路にかゝつてゐる橋などは、ほとんど古墳の石を使つてあるのださうです。又古墳のあさは畑にしたり、屋敷にしたりするため、掘られたり、けづられたり、又自然に雨や風のた

い位です。

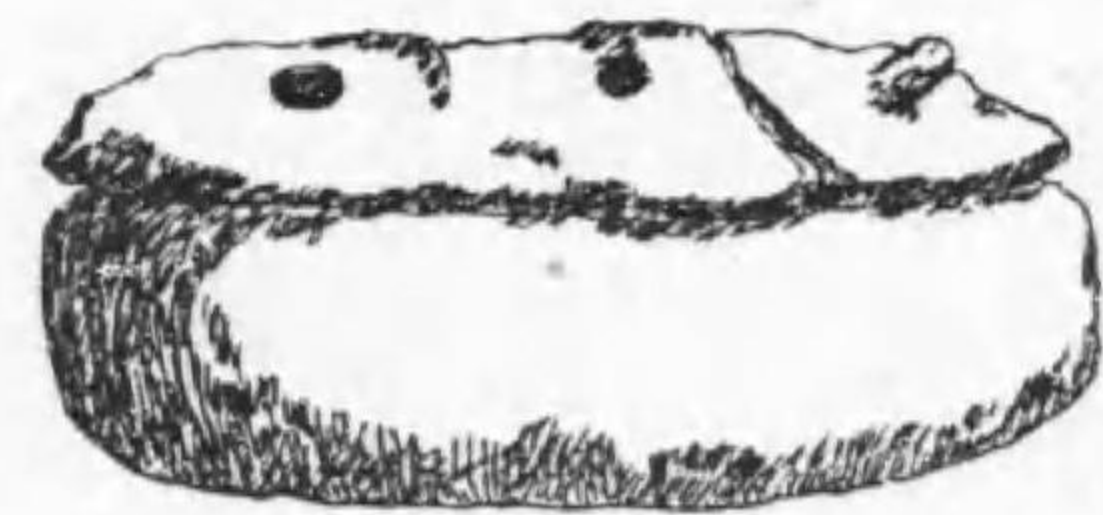
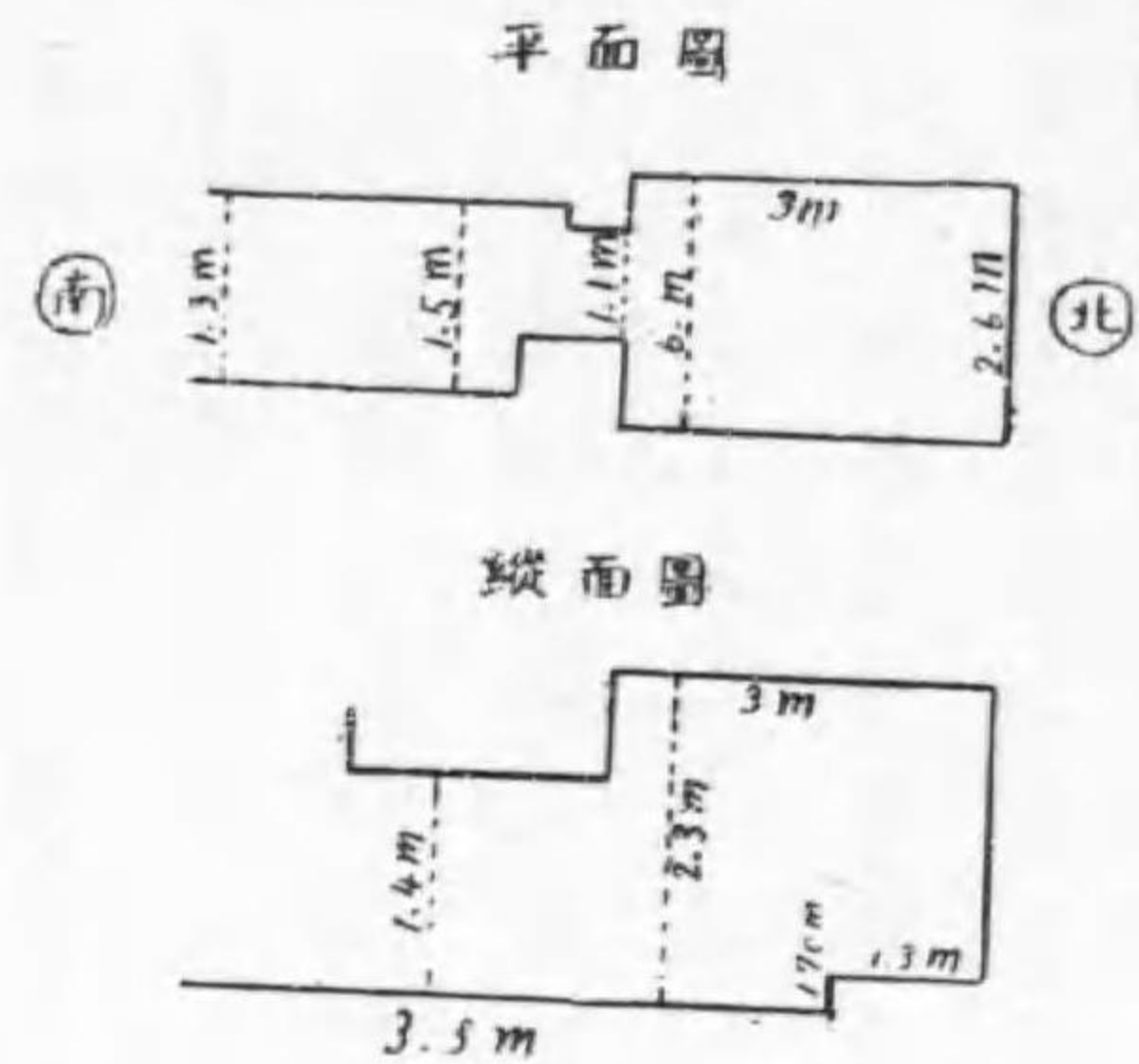
弘法穴古墳（第一圖を見なさい）

永興にあつた古墳の中ではこの弘法穴のみ残つてゐます。それは掘り出されてから石棺のあさに、弘法様觀音様の石像を安置して、土地の人が信仰したために残つてゐるのだと思ひます。この弘法穴は加茂の古澤傳平氏宅の裏手に、羨道を向けて正しく南面してゐる古墳です。然し羨道の一部はその上の石丈は取りのけられてゐて、封土もほとんど残つてゐないので、何式の古墳であるかわからないが、玄室の石槨丈は立派に残されてゐます。羨道は一寸かゝんで入る位ですが、玄室はずいぶん分廣いもので、正面の高さ十七センチメートル位の臺に觀音、弘法様を祀つて何時でも、お花ご線香は上げられてゐます。石槨の後の部分は一

枚石で、その他の部分は二枚石位で、大きな石ばかり使つてありますが、何時頃出来て、何時頃發掘されたか不明で、又、觀音弘法様

第一圖 永興加茂古墳

第二圖 産の原 出土石棺



を祀つた時、はつきりわかりません。この近所の地名を加茂と呼び、加茂神社といふ祠もあつたことから考へて見ると、古く京都の賀茂と何かの關係があつたのではな

いかと言はれてゐます。

永興にあるその他の古墳

弘法穴の東、約二十メートル位の所で十五六年前古墳の石槨を掘り出した事があります。又弘法穴の北百メートルの所でも十四五年前掘り出した事があります。ごちらも今畑になつてゐます。又峠の附近にも明治の前後迄は大きな古墳がありました。が之も掘られてしまひました。皆さんのよく登る丸山は、多分そのあとでせう。又首藤幸夫氏の竹林の中にも石槨の石材を採取したあとがあります。刀、劍、土器なども掘出されたが、たゞりをおそれ埋められ、之もわからなくなつてしまひました。大へん惜しい事です。

牛 祠 殿

大平寺の東の方を一寸山手に登ると牛祠殿に行きます。こゝには石像の大日如来を唐櫃の形した横一メートル、縦一、三メー

トル位の石の上に祠つてあります。この祠は石の寶殿で、入り二、

七メートル、横二

メートル、高さ二

メートル位で之

も古墳の石槨で

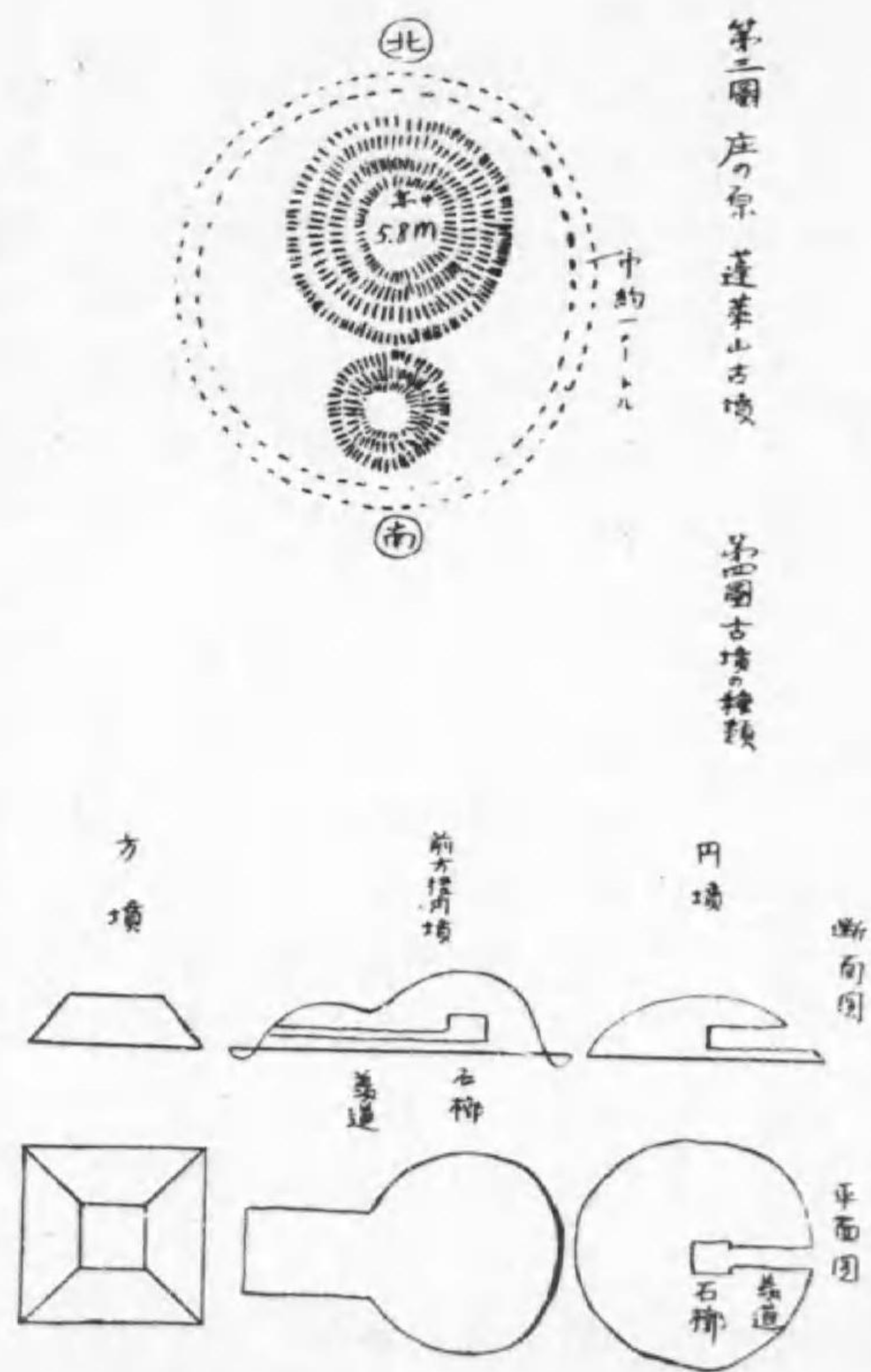
ある事はたしか

です。又この附近

にも石槨らしい

ものが二つ三つ

あります。



庄の原蓬萊山（第三圖を見なさい）

之は前方後圓墳に似てゐるが一丈形のうちがつたもので鏡形
と言ひます。南面してゐて、まはりは湟ですが水は無く、今竹が生
えてゐて墳丘の部分には大きな松が生えてゐます。大分市春日
神社の蓬萊山はこの古墳をまねて造つたのださうです。

庄の原出土石棺（第二圖を見なさい）

之は明治四十二年頃、庄の原蓬萊山古墳の近所から掘り出さ
れたといふ石棺で、今大分第一高等女學校の奉安殿のうしろに
据えられてゐます。之は略々舟の様な形で、蓋は二枚の石を合せ
てあつて、他の石棺とは一寸かわつた形をしてゐます。この近所
から出た石棺の内でも、之は形がよくこゝのつてゐて、立派なも
のであると言はれてゐます。

又この附近にも澤山あつたといふ傳へられてゐますが、畑や田に

なつてゐるのが多いさうです。片面の田崎氏の温古園の頂上にあるのや、深河内の山手にあるのも古墳と言はれてゐます。

三、金の鶏

永興から庄の原へかけての丘に古墳があつたといふ事については、次のやうな面白い言ひ傳へがある。

昔永興に善助といふそれは、
正直で村の衰者となつてゐた若い石屋があつた。或日いつものやうに永興の山で石掘をしてゐると、ふと何處からともなく鶏の聲がした。

長い春の日も早や西に傾いて籠の村には立ち上る夕餉の煙があはくたなびいてゐる。

「今頃鶏が鳴くとははて……」
獨りつぶやきながら、又仕事にかゝらうとする。

「こゝ掘れ、コケコロ」
どこかすぐ近くで確かにさう鳴いた様だつた。善助は不思議に思つて立ち上つた。さかりを過ぎた椿が赤く散つ

てゐる少し向ふの土がもり上つて、其上には高くせのびした虎伏だの蕨だのが茂つてゐる。

「こゝ掘れ、コケコロ」
善助は自分の耳を疑ふ程驚いた。確かに聲は其の下から聞えて來たのである。ざわ／＼と木の葉がゆれて日も暮れかかつてゐる。善助は恐ろしいと思つた。しかし掘つて見たいと思つた。手にした鍬で恐る／＼草をおし倒し土の丘を掘つて行つた。

ふと鍬先に手ごたへがあつた。善助は夢中で土をはねのけると底から壘一枚敷位もあらうかと思はれる大きな石櫃

が二つ並んで現はれた。善助は思はずあたりをきよろ／＼見まはした。然したゞ木が茂つてゐるばかりだつた。

「これは不思議だ。一体何が出るだらう。」
やつと蓋をおし開けて見ると中には茶の實らしいものがあふれる程つまつてゐた。

「何だ、馬鹿にしてゐらあ。」
善助はいかにも馬鹿らしく舌うちして、じつくり出た汗をおしぬぐつたが、よく／＼見ると黄金色の全く珍しい實である。

「何だらう、いゝは、これでももつて歸

れ」
 さげてゐた袋に一ぱいつめてもう一つの石櫃の蓋をおし開けた。中からは金色燦爛と目もまばゆい金の鷄がとび出した。鷄は動かうともせず石櫃のふらにとまつてゐる。風にゆれて金の羽毛が目をいるやうである。ぼうと上氣した善助は目を大きく見はつてそれを見てゐたが、やにはにとびついて懐におしこんだ。そして袋を肩にする。と全く暮れた山道を麓へと一散にかけ下りた。
 肩の袋が頭の後でざく／＼おどつた。何べんか石につまづいた。然し善助は夢中になつて懐の鷄をいだいて走つた。何

だか頭がぼうとしてたゞ涙の頬を流れるのを感じた。彼は口の中で幾度となく繰りかへした。
 「正直のお蔭だ。正直のお蔭だ。」
 あわたゞしく駆け込んで来た善助を見て妻は全く驚いてしまつた。泣く様な笑ふ様な顔をして語る善助の話聞きながら、金の鷄を大切に守つてまんじりともせずその夜を明かした。喜びは唯それだけではなかつた。夜が明けてから忘れてゐた袋をあけた。夫婦は又しても驚きと喜びでうなつてしまつた。といふのは中から出たのは茶の實ではなくて世にもまぶしい金

塊であつたからだ。
 善助夫婦は夢かと疑つた。が夢ではなかつた。それからといふものはだん／＼暮しがよくなり遂に大變な大金持になつたといふ。
 これを傳へきいた村人達は善助の掘

り残した茶の實を持ち歸つてお金に變るのを待つた。が何時まで経つても茶の實でお金には變らなかつた。
 其の後金の鷄は上方の方に賣られて行つたが、毎夜永興の石櫃に歸りた。いと鳴いたといふ事である。

四、私共の學校

皆さん私共の學校も今年でお年がちようご六十歳になりました。皆さんのおうちのお祖父様やお祖母様達の生れたと同じ頃の明治九年二月の誕生で、太田學校の名前で羽屋の大圓寺で開校されたのです。この太田學校が私共の學校の一番祖先であ

りますが、一人の先生に二十人餘の生徒が文庫をもちよつて勉強してゐた様は、昔の寺小屋と少しも變つたところは無かつたといふことです。その翌年分教場が上村の聖養寺に設けられました。したが、之は生徒の通學の便を圖つたからでせう。

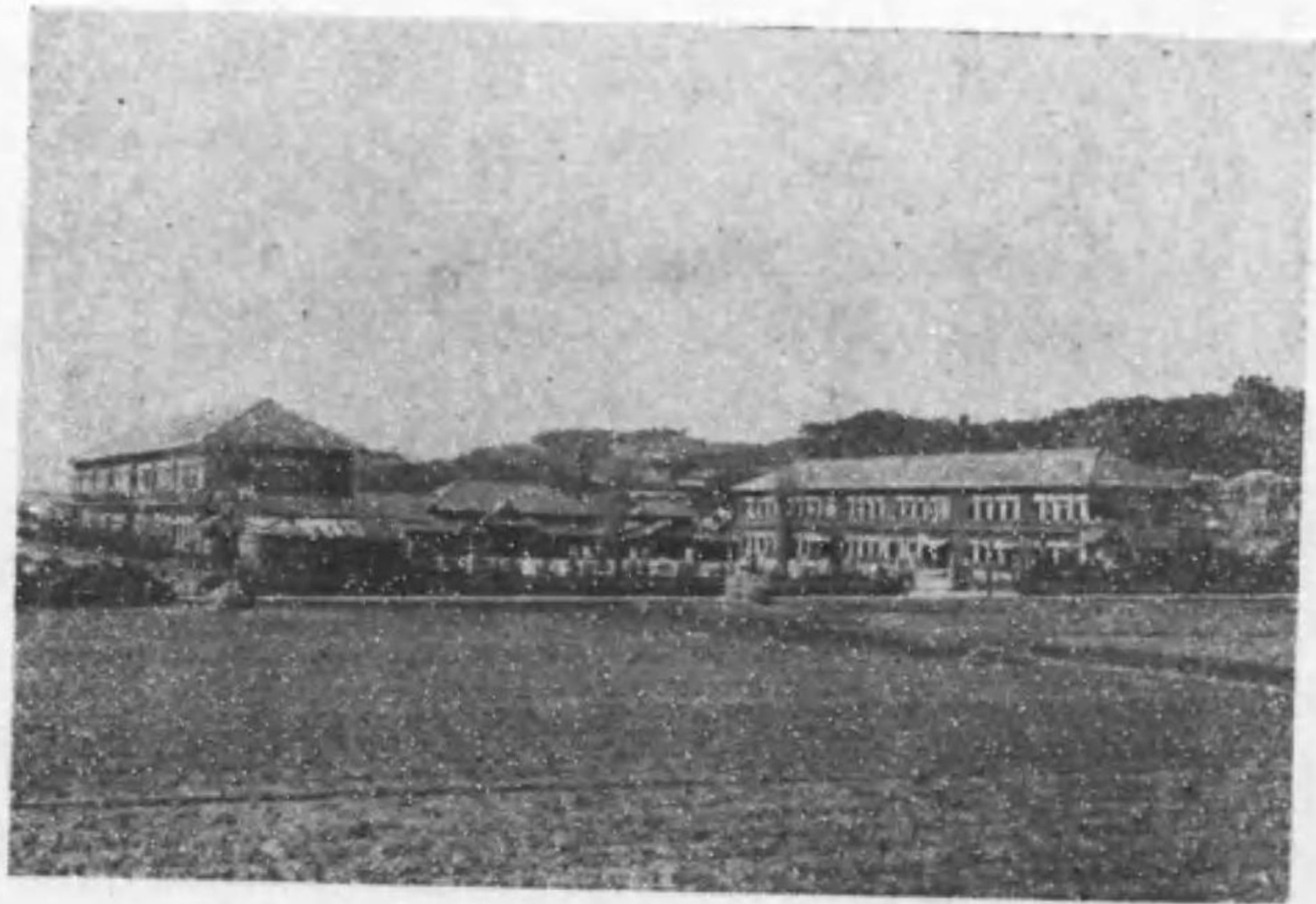
其の後豊府村と荏隈村とに分れるやうになつて、豊府村では古國府に羽屋第一學校と、畑中に羽屋第二學校とを設け、荏隈村の方では稻田學校が田中の勝音院に改めて設けられるやうになりました。永興學校といふのは明治十五年になつて稻田學校の改名せられたものです。同校は明二十二年十一月新校舎が永興の地今の城南女學校の西の廣場に建築されましたので、其の校舎へ移ると共に名稱も永興尋常小學校と呼ばれるやうになりました。之より凡そ一月前の十月には、豊府村の二校も合併せ

られて、羽屋の地へ新築された校舎へ移つて、之も名稱が豊府尋常小學校と改められました。今では其の校舎跡は住宅になつてゐますが、道路に面した方の石垣は當時の面影を残して居ます。豊府尋常小學校、永興尋常小學校になつた頃は、校舎も新式となり運動場もあるし、學校としての立派な體裁を備へるやうになりました。皆さんのお父様やお母様は大ていこれらの學校で學ばれた方々です。

明治四十一年大分町建設の爲、豊府村と荏隈村の二村が大分町、西大分町と合併されましたので、二つの學校も一つになつて大分町大分第三尋常小學校と改められ、更に翌年四月市制施行とともに、大分市大分第三尋常小學校と變りました。けれども學校はこれまで通り永興校跡と豊府校跡で授業を續けて居まし

た。現在の校地奥田字太田に只今の學校が出来上つたのは明治四十四年二月二十六日で、皆さん達の毎年お祝ひをする學校記念日が其の日であります。翌年高等科が置かれるやうになつて、校名も大分市第三尋常高等小學校と改稱いたしました。當時今の金池校を第一校、春日町校を第二校と呼んでゐました。

今も學校のしるしとして私共の列の先頭にひらめく校旗は、大正八年九月に制定されたもので、赤地に



校舎全景

黄の唐草模様の中に横に白の三線が太く表はされてゐるのは、第三校の意味であります。

大分市南大分尋常高等小學校に改つたのは、大正十三年の四月で、大分市に大道校、中島校の二校が増設されたのもこの時です。昭和八年四月單設高等小學校が設けられたので、従つて此の學校も高等科を失つて只今の大分市南大分尋常小學校になつたわけです。

今日では校舎も次第に増築されて運動場も廣く設備も完全に近くなつてゐます。先生も二十名にふえ生徒の數も殆んど一千名になりました。其の發展のはげしさには驚かされるに共、力強くも感ぜられます。

この六十年の輝かしい歴史のある學校で學んでゐる私共は

ほんごに仕合せだと思ひます。

五、郷土の地理

位置

丸山に登つて眺めると大分市が一目に見えます。この丸山から續いた細長い丘が丁度真中にあつて、市を南と北に分けてゐます。私共の住む南大分はこの南の部分で、廣いたんぼのそこ、に村があり町がありますが一番よく見えるのは學校と大分川です。

大分川の向ふが大分郡で、明礮橋の向ふに靈山や本宮山を後にして東植田や

種田の村々が見えますし、上村や庄の原に續いて賀來があります。

東の方には新しい廣瀬橋が白く見え、いかり島のある瀧尾村が續いてゐます。

地勢

この丸山の丘は高崎山の脈が東に伸んで、庄の原の臺地となり、なほ東に進んで永興に来てこの丸山となり、更に東に伸んで上野が丘となつてゐるのです。

この丘の部分は南大分のほんの一

部で、大部分はあんなに廣い平野になつてゐます。

南から東にかけては水量の多い、流れのゆるやかな大分川があります。此の川は南大分にとり誠に大切なもので、電氣を起したり、上水道として飲水にしたり、初瀬井路に引いて田にそゝがれたりします。

此の南大分に農業が發達し、産物もたくさん出来るのは主として此の川のお蔭であります。

氣候

大分の土地は雨量も多く、温度も年平均攝氏十五度位で暖く、日本の中でも有

名な氣候のよい處で、従つてとても住み心地のよい處だといはれてゐます。わけても南大分は北にこの臺地があつて、寒い北風をさへぎつてゐるので、特に南大平寺旭町、永興等すぐ丘の南側にある土地は非常に温かです。蜜柑や野菜等がよく出来るのはこの爲でせう。

風の方向は冬は北西の風が多い爲、九重山から吹き下す雪風で寒い日が出るが、夏は南東の風が多い爲にとても涼しいのです。一年中を通じると北西の風が多く吹きます。

區分

大分の市役所には市長さんがゐて、市全体のお世話をして下さいますが、尙よく大分市を治める爲に澤山の小さい區に分けてあります。そして各區には區長さんがゐて色々なお世話をします。皆さんの村々にも區長さんがおいでの筈だからよく知つてゐるでせう。

私達の南大分は十六區に分かれてゐて、區の名前は第五十三區から第六十六區までついでゐます。

區名	地名	戸數	區名	地名	戸數
五三	南大平寺	五一	五五	三ヶ田町	一二三
五四	旭町	一〇九	五五(別)	永興	九〇

五五(別)	永興	三九六二	田中	七一
五六	庄ノ原	二七六三	畑中	一〇一
五七	竹ノ上	二八六四	豊饒	五〇
五八	深河内	一七六五	羽屋	四八
五九	上村	五九六六	古國府	一三七
六〇	尼瀬	二四		
六一	奥小路 明礮町	七五	計	一〇四九

丸山から町の方(山北部)と南大分を見較べるとすいぶんちがつて見えますね。南大分の方が家の數も少いだけに人口もすつと少く約九分の一しかありません。

山北部 戸數 二二五九 人口 五四〇六人

南大分 戸數 一〇四九八 人口 六八三七人

これはこの上野が丘が横たはつてゐる爲に町との交通をさまたげられて色の不便がある爲です。然し産業を興し商工業が盛になればきつと人口はふえて賑かな町となるでせう。

産業

南大分の戸數一〇四九戸のうち

農業 六〇五戸 商業 二四七戸
工業 三五戸 其他 一六三戸

農家が多いので産業の大部分は農業である。

氣候が良い上に平野が廣く開け雨量も適當で其の上大分川の水は初瀬井路

を通り各地に設けられてゐる水路によつて村々の田にそゝがれる爲に稻の育ちが大變よい。近年は耕地整理も行きたつて耕作に便利となつた爲に農産物は年々増加してゐる。

養蠶業は氣候が良く桑の伸びもよいので各部落共盛んで約二百二十戸の家で春夏秋と續いて三回飼育してゐる。しかし近年繭の價が安くなつたので幾分か衰へた感がないでもないが市の勸業課等の奨励によつて相當の收益をあげてゐる。

南大分で現在非常に盛んになりつつあるのは蔬菜園藝である。市街地に

近く土地も適してゐるので、農家の副業として蔬菜を栽培し市場に賣出すことは大變有利な事と思はれる。特に大平寺明礪等では熱心な人々が専門的に深く研究し温室温床を利用して速成栽培をしてゐる。そして他よりも優れた物を一時でも早く市場に出す爲珍らしいので非常な収益をあげてゐる。

のである。又旭町大平寺の密柑山も將來大いに収益をあげるであらうし、梅園なども廣くして町から多くの行樂の客を引いたら面白いであらう。農村南大分はこれから大いに此の方面にも意を用ひることが大切である。

六、國司時代の古國府

國司はクニノツカサともいひ、王朝の頃天子様の御命令で國を治める役人をいふのです。國司の長を守さひ、大抵從五位

の人がなりその下に介・掾・目等の役人がゐて、その役所を國府・國司廳又は國のたち等いつたのです。大昔日本では國々に國造をおいて政治をさせてゐたのでしたが、大化の改新の後全國の六十餘國を大・上・中・下の四等に分け國毎に國司を置いて治める様になりました。

我が豊後の國は上國で奈良時代聖武天皇の天平十五年今の古國府に國府が置かれ、外從五位下陽侯史眞躬が豊後の守として始めてお下りになつたのです。之を前後して僧行基菩薩等が下つて來て國分寺(賀來)永興寺(永興)寶戒寺(五丁津留)等の大伽藍が次々たてられ、南大分は古國府を中心として豊後第一の都會となつたのです。かうして約四百五十年間大友能直公が來るまで三十數代の國司が代々治めてゐたのです。

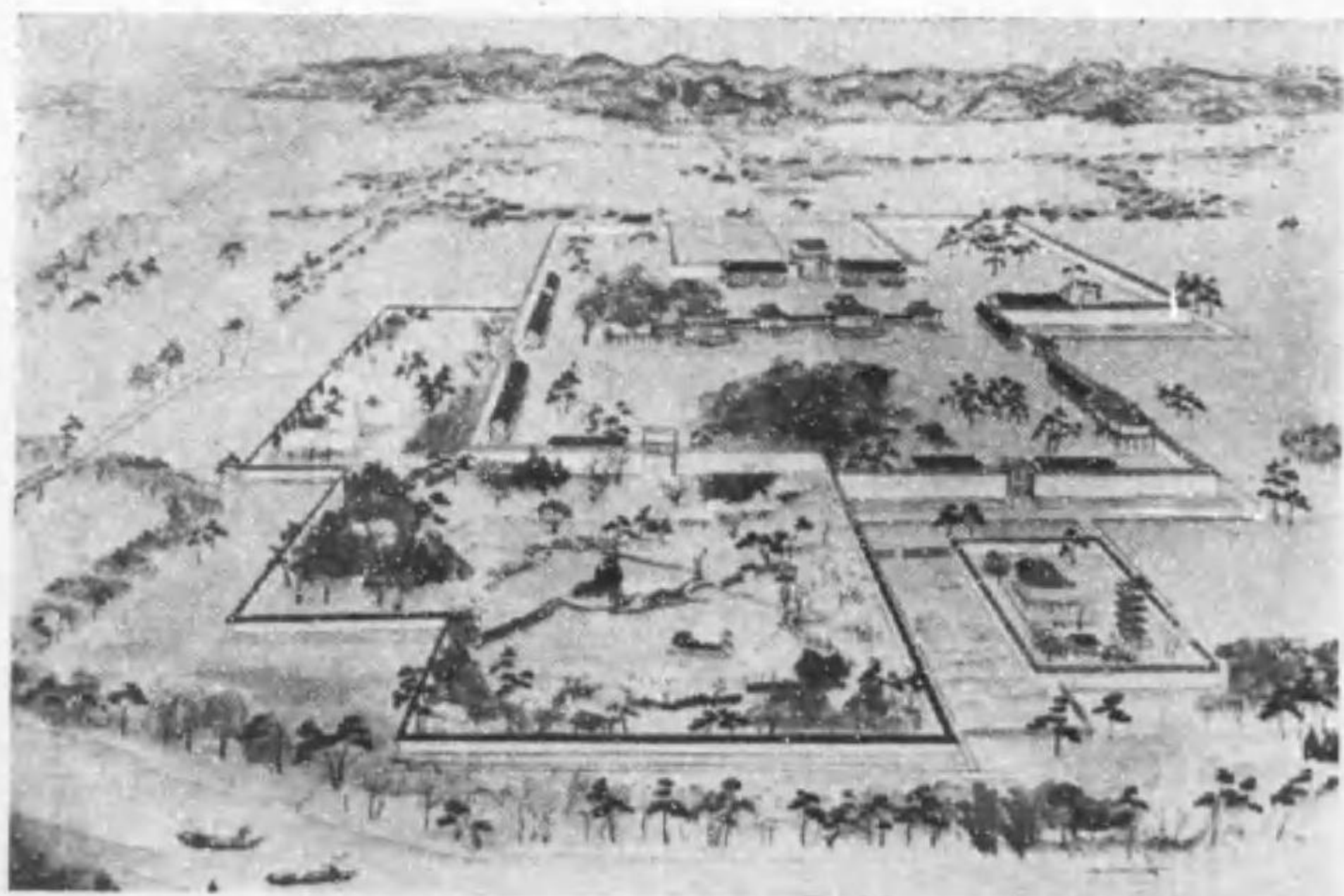
その頃大分川は今昔圖にある様に流れてゐたらしくその流に臨んで建てられた國司廳は随分大きく古國府下田中から羽屋にかけての一带に大きい堀と塀にかこまれて美しい國司の館や廻廊や樓門が聳え下役の屋形も並び色とり／＼に咲き亂れた花苑・泉水・園などがあり大平寺から永興寺にかけては賑やかな町がつゞき大平寺・清水寺・永興寺・岩屋寺・寶戒寺・祇園社などが堂や塔を聳やかしてこの南大分は非常な賑やかさであつたと思はれます。

七、大友時代の古國府

建久七年鎌倉將軍源賴朝は今までの國司に代へて豊前豊後

の守護職として大友左近將監能直をつかはしました。能直はこの時年僅かに十九才でしたが眞に偉い大將で三月鶴ヶ岡八幡宮に參つて武運を祈り古莊四郎重吉を先驅とし、二千餘騎を従へて鎌倉を出發し豊後濱脇浦立石に上陸いたしました。そして従はぬ者を討つて府内(今の古國府)の國府趾に館を建て大友屋形と稱し豊前豊後を治めることゝなりました。

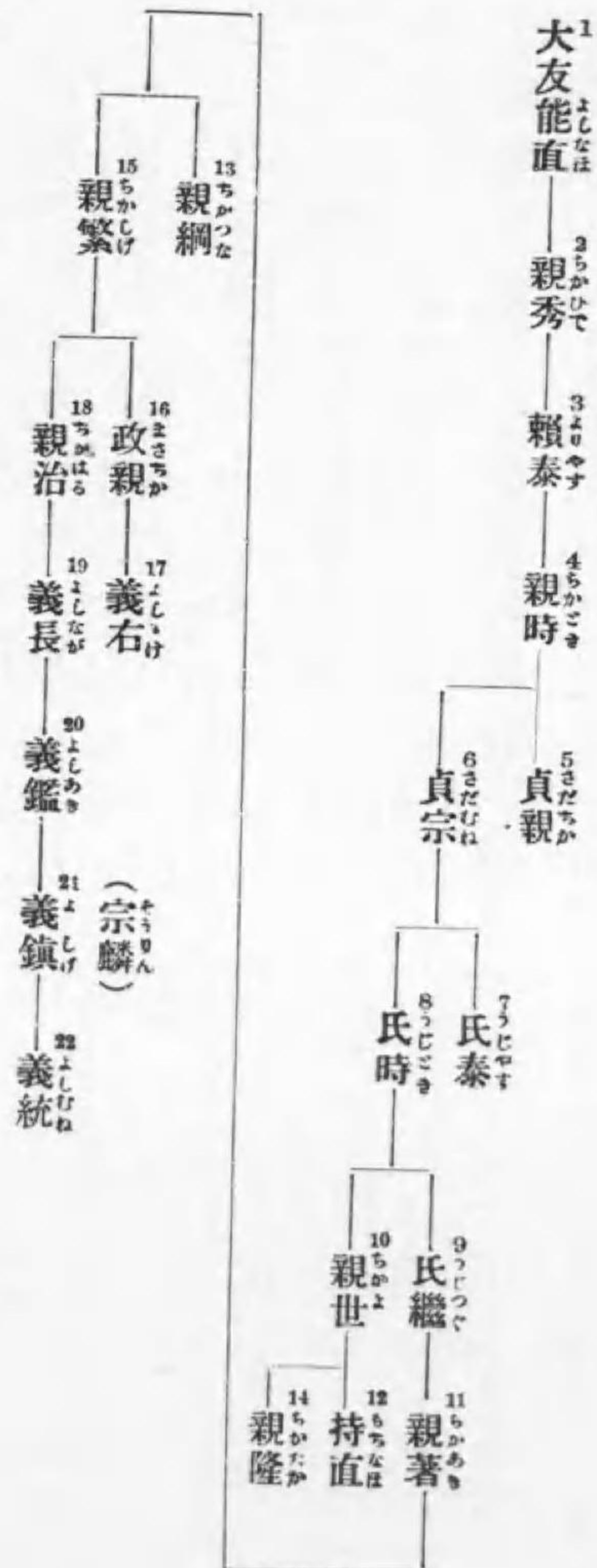
これから二十二代三百九十八年



(形屋女大の初最) 館の司國

間を大友時代と申しますが、後上野に西山城を建て第七代氏泰がこゝに移つてから圓壽寺も寶戒寺も次々上野に移し町も山の北側になり、國府趾の屋形はだんく衰へて行き、大友氏が亡んで後は全く荒れて田畑に變つてしまひました。

大友氏略系



八、元寇の役と大友賴泰、貞親

皆さんは元寇の戦で北條時宗が元の使を斬つたお話や河野通有が敵將を捕へたお話はよく知つてゐるでせうから、今日は我等の郷土の人々の手柄話をいたしませう。

其の頃我豊後國を治めてゐたのは大友能直から三代目の式部大輔賴泰といふ人で、二豊の守護職兼鎮西奉行(九州の武士を取締る役目)をしてゐた偉い人でありました。
第八十九代龜山天皇の文永年間勢に

まかせた蒙古が我國に無禮な書を送つて來たので、執權北條時宗は怒つて之を斬り九州の武士に戦の準備を命じた事はよく知つてゐるでせう。この時賴泰は時宗の命令で筑前の少貳經資と共に九州の諸將を指圖して蒙古の大軍を防ぐ最も重い役目をおぼせつかりました。賴泰は固い決心でこの重い役目を引受け、家臣の戸次重秀、志賀泰朝、大藏永基、挾間直重等を率ゐて博多に行き戦の準備を致しました。
文永十一年十月十九日九百餘艘に三萬餘の大軍を乗せて壹岐を侵した蒙古軍は博多に上陸し、宮崎神宮に火

をつけ、大砲や弩弓をはなつて攻めこみました。頼泰は九州の諸將を勵まし、く蒙古軍と大いに戦ひ、敵將を捕へたが随分苦しい戦をしました。しかし二十日夜神風が吹き、賊船二百餘艘は覆り、一萬三千五百餘人が海に溺れ、他の船はほうほうの體で逃げ歸りました。その中逃げおくれた一艘がまご／＼してゐたのをひつ捕へ、乗つてゐた二百二十餘人を太宰府の水城で斬りすてました。

道具から刀槍弓などまで用意しました。しかし攻めて行くより來たら討やぶらうといふ事でやめになりました。そこで時宗は頼泰に九州の諸兵は互に仲よくし、力を協せて外敵にあたるよう、又石壘や水城等十分防ぐ用意をするよう監督し、指圖する事を命じました。

其の後時宗は一度は、我國から蒙古を攻めようとして船の準備を頼泰に命じました。頼泰は命をうけて野上太郎等に

弘安四年元軍が再び攻めよせた時、頼泰の三男因幡守親時(四代)は第一番にこの事を京都の龜山上皇に申上げ、五代出羽守貞親は部下の將士を率ゐて博多に行き、九州、中國、四國から集つた諸將を指圖して元軍を防いだ爲、遂

に元軍は上陸する事が出来ませんでした。

悟で戦ひ、大いに敵を破りました。

あの河野通有の勇ましいお話はこの役であつたのですが、貞親も少貳景資、竹崎季長、菊池武房等と共に進み死ぬる覺

なほこの戦で貞親に従つて豊後から行つて手柄をたてた將士は實に多く、深堀時光、志賀泰朝、朝來野公繼、都甲惟親等數へきれぬ程であります。

九、水源地

本宮山と靈山の頂に白い入道雲が立つてむじあつ、い晝さがりに、へかへる様に湧いた青い稻田の中の道をぬけて、正男君は唯一人、夏休みに先生から出された理科の研究をする爲、水源地へ來ました。

小石の敷かれた美しい道に植木の影がゆれてゐるし、向ふの

大きな家からは電気モーターの響がライオンのうなり聲の様に聞えて來ます。

見るからにやさしさうなおちさんがゐてニコ／＼しながら水源地の地下状態の模型のある處につれて行つて次の様なお話をして下さいました。

おこの大分川の水は日本でも有名な綺麗なそして良い水です。先づこの川の底を約五百メートルも深く掘つて、七十五センチメートル角の鉄筋コンクリートで造つた「集水管」といふ管を川の流に沿うて丁字形に埋めます。長さは百五十メートルもあつて、これには横に多くの穴が開いてゐます。川の水はこの穴から流れこんで來るのです。

正その集水管は底に埋めてあるといふのにどうして水が流れ

こむのですか。」

おそれはね、わけのない事です。一体川の水は底の石や砂の中に浸みこんで、石と砂と砂の中を流れてゐるもので、普通私共の目に見えてゐる川の流を「表流水」といふのに對してこれを「伏流水」とよんでゐます。つまり一種の地下水ですね。この伏流水が集水管の穴から浸みこんで來て、この「導水管」といふ君たちが二人でかゝへる位な太さの管の中へ流れて行くのです。

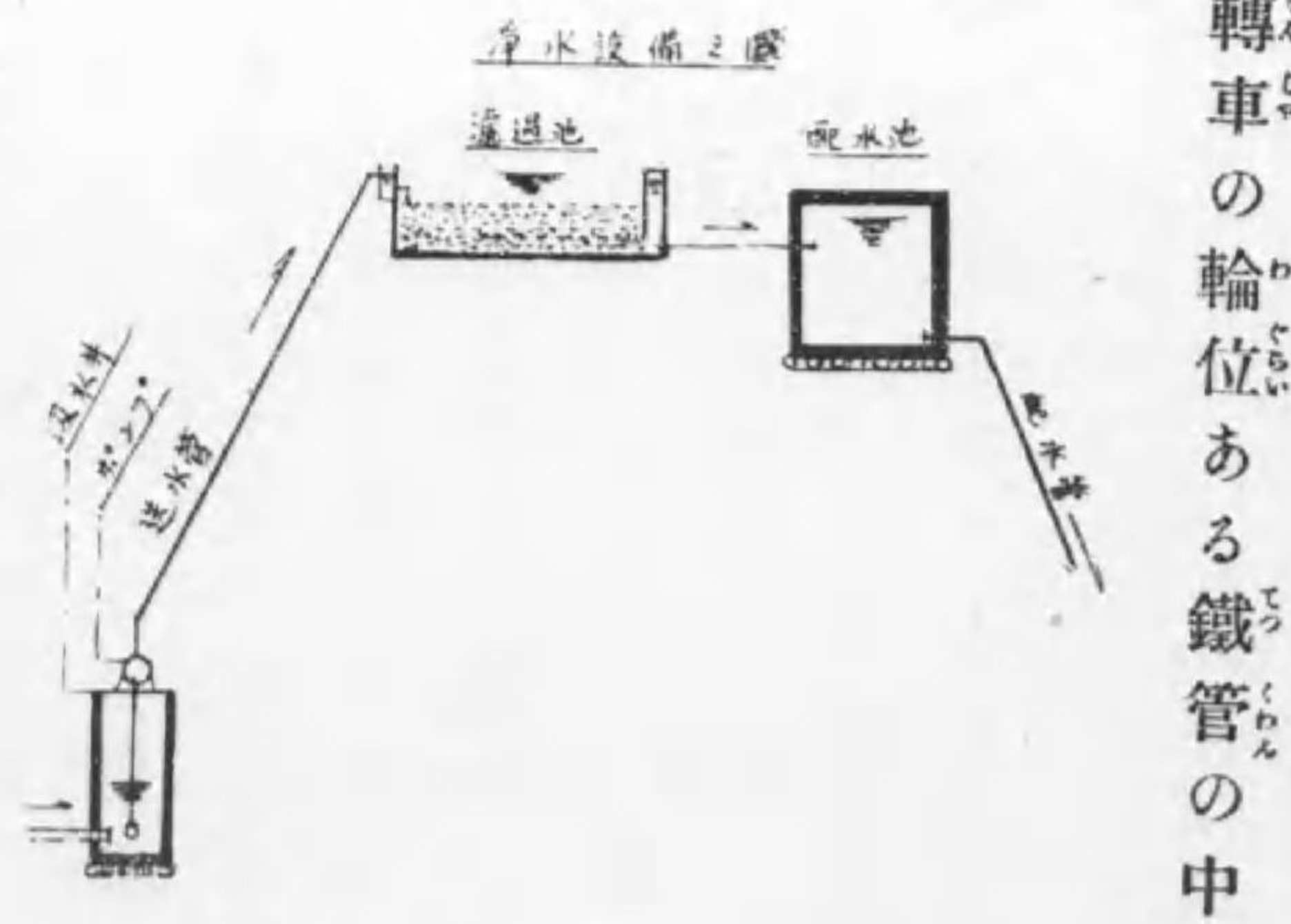
正その導水管の水はどこへ行くの。」

おその次はね「接合井」といつて、今度は君達が四人でやつと抱ける位の太さで、深さ十二メートルもある地下室に來て溜るのです。

こゝに溜つた水は次に大きさが自轉車の輪位ある鐵管の中を通つて「汲水井」といふ八疊敷位の廣さで高さは六メートルもある大きな室に行くのです。あゝ、さうく。この家の下にその大きな汲水井があるのです。さういひながら正男君をつれて、ポンプ室にはいりました。

おでいよくこゝまで来た水がこの電氣モーターの力で吸上げられて、峠の淨水場へ行くことになるのです。」

正「こゝからあんな高い峠の上まで水を送るのですか。」

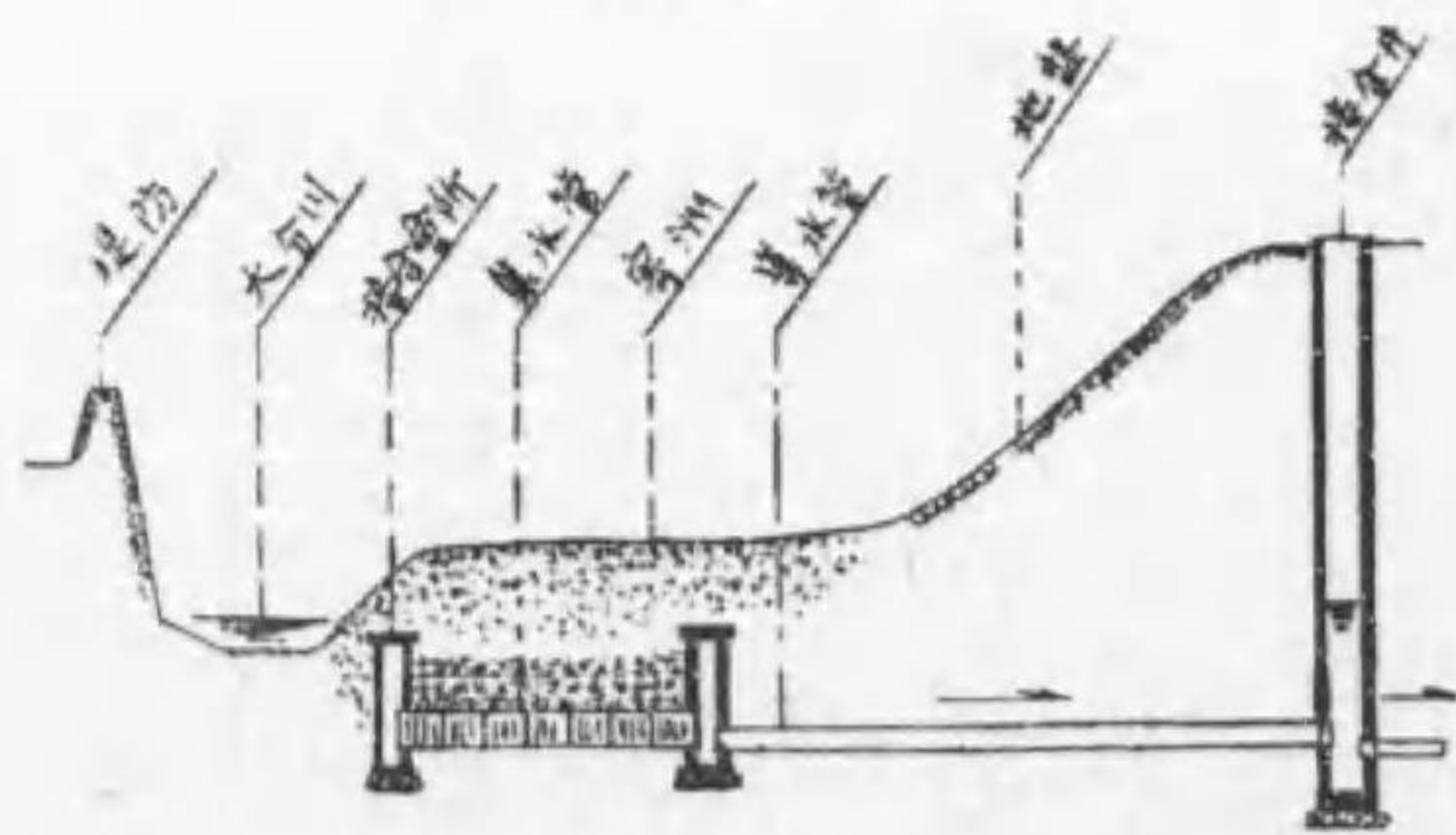


お「さうです。このモーターは七十五馬力で、かうしてこゝには三臺据付けてあるが、普通二臺で仕事をさせてゐます。二臺のモーターがうなり出すと、この二臺のポンプが一時間にある酒屋にある四斗樽で汲んだら六千杯位汲まねばならぬ程の水をこゝから二千五百メートルもある峠の淨水場へ送るのです。」

正「どの位の速さで送られますか。」

お「それはこゝの水源地から約五十メートルも高いあの淨水場まで一臺のポンプでは九十分、二臺ではその半分の四十五分で送られます。ちよ

取水設備之圖



つと考へるご遅い様だが、鐵管の太さや、その他色々な事を考へると、一秒間に約一メートル位の速さが最も適當ですからさうしてあるのです。

正「でその水はすぐにそのまゝ飲まれるのですか。」

お「こゝから行つた水は淨水場でこして立派な水にされて、それから市中の皆さんの御臺所に行くことになるのですが、この水源地を出てから二十四時間つまり一晝夜の後に皆さんのお腹へ入るわけです。で今こゝを行つてゐる水は明日の今頃はあの春日公園の噴水もなつて出ることになるのですね。」

正「大分市では水をどの位用ひますか。」

お「さうですね。一年中冬よりも夏の方が多くいるし、同じ夏でも雨降りの時よりお天氣のよい日に多く使はれますので、はつ

きりごは言へませんが、まあ一人一日に平均冬は七十リットル位夏はずつと多く百二十から百三十リットル位ですね。」

正「火事の時なんかには水をたくさん送るでせう。」

お「いや、別にこゝから水を送らなくても、淨水場にあるあの配水池からたくさん送り出すのです。火事が長い時間續いて配水池の水が少なくなりさうな時には、淨水場にあるおちさんから電話がかゝるのです。その時は夜中でもスイッチを一寸ひねれば忽ち元氣よくモーターが廻つてポンプは澤山の水を送り出すのです。」

正「大變便利ですね。」

お「便利は便利だが、そんな時があつては困るね。」
やさしい顔を一層ニコ／＼させて、おちさんはモーターのむつ

かしい機械を見てゐました。

正「大分の上水道は何年前に出来ましたか。」

お「さうだね、君は今いくつかね。」

正「十二です。」

お「では今から七年前だから君が丁度五ツの時だね。」

さういへば小さい時、峠の山をほりくづしてゐるのを一度見た事があるなあ、ご正男君は小さい時分の事を夢のやうに思ひ浮べて見ました。おちさんは更に話をつづけて。

「大分市にこの上水道の出来ない時は色々水の爲に不自由な事ばかりあつて、一日も早く上水道の出来るのを待つてゐました。その時の市長さんはソラ彼處の高い森の中に赤い屋根のお家が見えるだらう。あそこにあるた三浦數平さんといふ

方だつたのです。今はもう亡くなつてしまつたが、その市長さんがこの話を出して大分市に上水道が出来る様になつたんです。工事にかゝつたのが大正十四年三月十日陸軍記念日の日、工費百三十萬圓を費して昭和二年六月に出来上りました。

その時の苦心は非常なもので、工事にかゝつてからは毎日毎日たくさんの人々が汗を出して働いた爲に、全く藪であつた此處もこんなに立派な水源地と變り、晝でも暗い様に繁つてゐた峠の松山もあゝした見事な淨水場になりました。あそこは見晴しもいゝし、つゞじも綺麗に咲くので大分の名所に數へられてゐるが、此處も今多くの櫻を植ゑてありますのでやがては櫻や螢の名所となりませう。だがかうした裏には涙

の出る様なお氣の毒な話があるのです。おちさんは一寸話を止めて目をつぶりましたが、やがて「それはあの浄水場の工事中の事です。深い穴を掘つてゐる時、ごうした事か上の土がなだれ落ちてアツさいふ間もなく数名は生理めになつてしまつたのです。上を下への大騒ぎで、土を掘りのけた時はもう冷たい体と變つてゐました。『お父さん』と泣きつく可愛い子供さんの姿は實に涙ぐましい程でしたよ。かうした難工事の爲に尊い一命をなくした人がある。ここを思ふ時人間は常に楽しい生活の裏には、それに相當するだけのみじめな犠牲の拂はれてゐる事を忘れてはならないと思ふね。一滴の水をいたゞくにも『感謝』の心を起していたゞきたいものです。」

話してゐるおちさんはいつしか露のやうな涙をうかべてゐました。聞いてゐた正男君も知らずくまぶたの熱くなるのを感じました。

遠く南の方では雷が鳴つてゐます。扇風機の前で冷たい麥茶を御馳走になつた正男君はこのやさしいおちさんにお禮をいってドアの外に出ました。靈山にはもう雨が見えてゐました。大分市六萬の人口を養ふお母さんのお乳もいへる大切な水が我等の南大分にあるのだ。かう思つた正男君の耳にはポンプ室から聞えて来るモーターの音は一層強く響くのでした。

一〇、永興寺

永興の釋迦堂のある處には昔大きなお寺があつて長湯山永興寺といはれてゐた。今では殆んど見る影もない庵寺で、これが昔は數十の伽藍が高く低く莖を並べ、府内第一のお寺であつたと聞いては驚かぬ人はあるまい。

咲く花の匂ふ奈良の都で大佛様がつくられた天平十五年、聖武天皇は更に國民が安らかに暮らされる事をお祈りになつて、國毎にお寺をお建てになつた。この豊後の國に國分寺が建てられたのも

その御時である。それが今の賀來の國分寺で、昔は金光明四天王護國之寺といつてゐた。御佛の尊い御助けを信じて帝の有難い御願に感動した人々は、我も我もと材木や寶物を奉つた。それが爲大きな國分寺が建つた上に多くの材木を餘した。遠くこの事を聞召された皇后様は新しく行基菩薩にお命じになつて餘つた材木で國分寺に劣らぬお寺をこの永興の地にお建てになつた。それがこの長湯山永興寺であるといふ。

その頃の寺の持田は十三町八段歩もあり、方數町の境内の東に仁王門を

開き、堂塔伽藍數十棟、丹青の彩美しく、大きくそりをうつた莖が紺青の空に白雲と映りかはして實に國分寺以上の大寺であつたといふ。

かうして數百年餘、御寺は年と共に榮えて行つたらしいが、室町時代以後次第に衰へ、戰國時代の頃、天正十四年の冬、遂にこの永興の地から影を失ふに至つたのである。

その頃豊後を治めてゐた大友宗麟は、勢強く次第に九州を従へて行つたが、日向の耳川の一戦で薩摩の島津の大軍に敗れてから、戦ふ毎に負けて行つた。勢に乗じた島津家久の軍勢は豊後の國に攻

入り、松尾城、鶴ヶ城を陥し、府内にせまつた。大友方は戸次河原の一戦にも大敗し、四國から援けに來た長曾我部信親は戦死し、義統は仙石秀久、長曾我部元親等と共にやつと府内に逃げ歸つた。戦ひつかれた義統は仕方なく上野の館をすて、險しい高崎山の頂に陣を敷いた。勇將吉弘、統幸は手兵三百騎を従へて、祇園河原(廣瀬橋の所)に群がる敵軍を防いだ。だが止め得ず、義統は更に豊前の龍王城に退いた。府内に亂れ入つた島津軍は民を殺し、家をかすめ、はては其處此處の神社佛閣にまで火をつけた。

炎々と燃上る大伽藍倒れ落ちる五重塔泣き叫ぶ人の聲

かうしてこの永興寺も全く焼け落ちてしまつたのである。其の後秀吉の援によつて宗麟は勢をもり返して島津軍を討ち破つたが、戦すんだ跡には黒く焦げた礎石や焼け残りの柱があるだけで、賀来の國分寺などと共に哀れな焦げ土と變つてしまつた。

釋迦堂の由来

昨日に變るこの哀れな焼跡に首なしの釋迦像が探し出されたのは戦が止んでから大分後のことであらう。なげき悲しんだ信者の一人が或日焼け跡に立つ

てゐると遙か谷間の岩窟に何かピカピカ光るものがある。不審に思ひながら行つて見ると、あら嬉しや、それこそ尋ねる釋迦像の首であつた。飛立つ思ひで持ち歸り、京都の佛像師に首をすげることが頼んだ。さて後日之を迎へに行つたが同じ様な佛様が多いので見分けがつかない。迎への者は、

『若し我が郷の御佛に靈があるなら、何卒御しるしを顯し下さい。』

と誠心こめて祈ると、一つの御像が頬笑まれた。迎への者は大いに喜んでこれを奉じて歸り、庵寺に祀つたといふ。

この庵寺は今の城南莊即ち前市長故三浦數平氏宅の處にあつたらしいが約八十年後の萬治年中又最初の永興寺の跡に寺を移し建てかへたといふ。そしていつからか名も永興寺とよぶ様になつた。陵護寺から来たともいふ。其の後延寶元祿の頃から諸國の靈場を巡禮する人の間に古いお寺であつた事が知られ出し、それから約八十年後の享保十年美濃の彌專越後の傳西等十餘人の行者が来て立派な釋迦堂を建てた。この頃から釋迦堂も次第に盛になつて西國に巡禮する六部等が多くこの釋迦堂に參詣したといはれてゐる。國分寺も其後に薬師

堂が立つて名高くなり、一里の釋迦に二里の薬師、など府内の俗語として唄はれてゐた。

又昔から柞原八幡の放生會、六月廿九日、八月十六日、木馬の頭、獅子の頭、ひやうの山を永興寺から二つ國分寺から一つ奉つたとも傳へられてゐる。

その後嘉永六年の大地震で壊れやけてなくなり、安政七年里正首藤清右衛門氏が主となつて今の永興寺釋迦堂は建てられたといふ事がお寺の由来記にある。

今も永興には千堂寺、門前佛供田、狩野、東屋敷、上屋敷、前田等多くの昔をし

のばせる名が残つてゐるし、時々地中から出る布目模様の瓦や石質の棟瓦(釋迦堂にあり)や高麗狗の隅瓦(後藤正己氏藏)や經堂の礎石らしいもの(高さ、七十五厘の上表面に深さ十二厘位の圓い穴がある)等が昔を語つてゐるだけである。

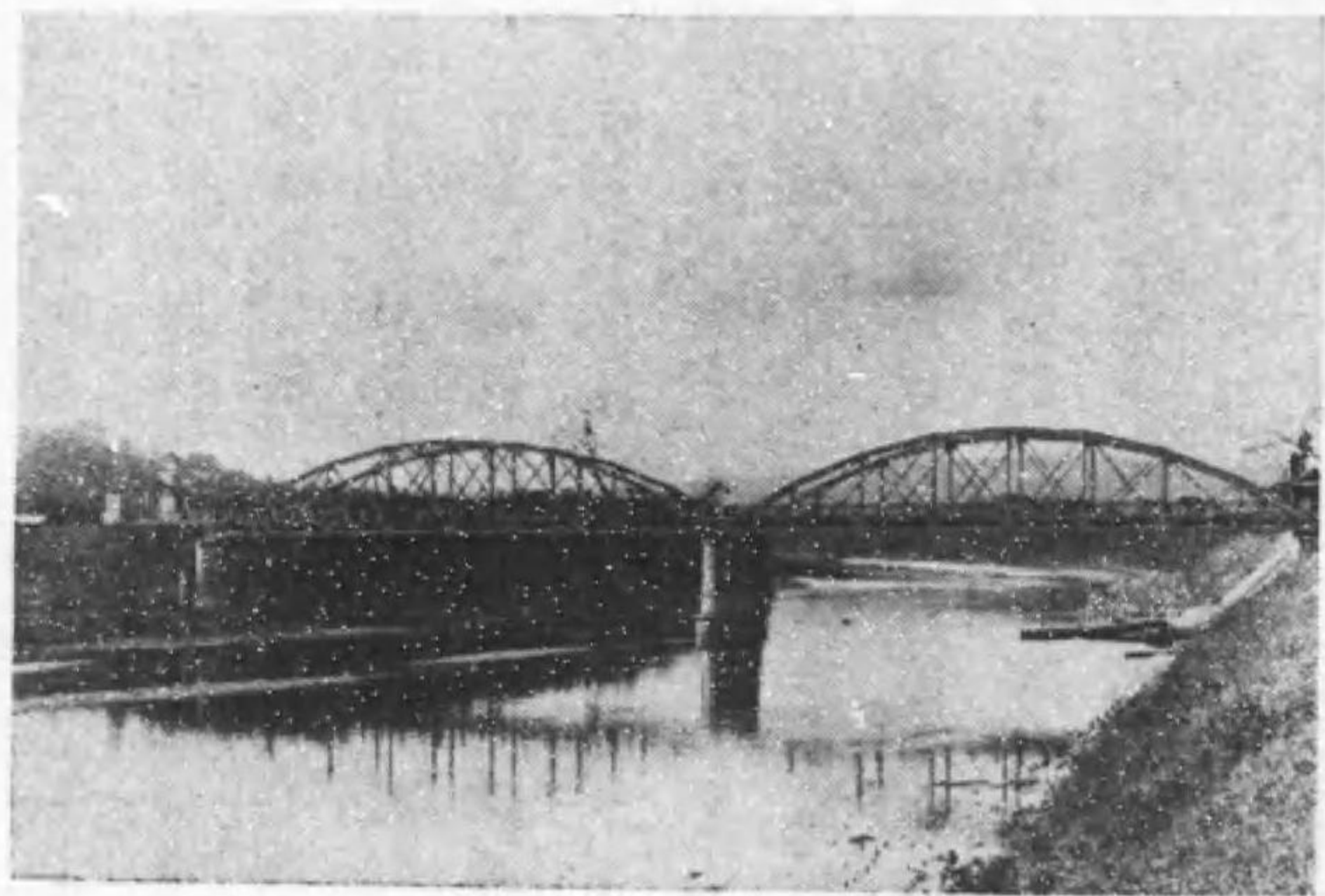
一一、明 磧 橋

君の此の前のたよりに、水泳の事があつたね。さう言へばもう別れてから五年目の夏が来たわけだ。よく二人で、あの明磧橋の下であばれながら泳いで、くされかけた橋のあしにつかまつて盛んに水

かけをやつたものだね。けれど、これは何時か書いたことがあつたと思ふが、あの古い橋も、今ではびつくりする程立派な橋になつてゐる。馬車や自動車(自動車が通る度にぐらぐら)と氣味わるくゆれてゐた細長い木の橋が、明るい朱塗の鐵のつり橋になつて、煉瓦式のコンクリートが下駄の音を氣持よくひびかせてゐるやうすを君に見せたら、と思ふよ。

かたむきかけた橋のてすりにもたれて、よく二人で眺めてゐた由布山の富士に似た美しい姿と、絶えず流れてゐる大分川のやさしい水音とは、あの

時どちつとも變つてゐないが、たゞ橋だけは全くちがつてしまつた。僕は時々この橋の上を通る事があるが、その度にいつも由布山はこゝから見た姿が一番美しいのではなからうかと思ふ。ゆるやかに曲つてゐる大分川の曲り目の向ふに遠く、晴れ渡つた空にすつきりした姿を見せて立つ由布山。山と川、ありふれた組合せ



明 磧 橋

ではあるが、山は川によつて、川は山によつて一層引き立つてくるらしいな。今この明磧橋の下には、夜になるとボートが浮び、赤い提灯をかけた廻らした屋形船が、明るい笑ひ聲をのせて上下する。これも二三年前からの事で、君は知らない事だが、夜になると街の方から可成の人が涼を追

ふて、こゝに遊びに来るさうだ。そんな人達はこゝで、或はオールに合せて歌をうたつたり、或は舟で捕れた川魚の料理に舌つゞみを打ち乍ら、静かな水面を往來したりする。そしてそれを見下しながら、夕涼みの人達は冷いがんじやうな鐵の橋梁にもたれて、かるく浴衣のすそをはらつて過ぎる涼しい風に、夜の更けるを知らず世間話に花を咲かせる。明礮橋の夏の夜は、水面を無数のほたるが飛び交ひ始める頃から、賀來の市が終る頃まで、この明るい賑やかさが續くのだ。賀來の市で思ひ出したが、お祭に參る人達のために、これも二三年前から、この明礮橋か

ら客を乗せた屋形船を馬に引かせて川を上下するやうになつた僕も昨年九月六日の晩は、この屋形船のお客さんの一人だつた。しづかな瀬の音を聞き、涼しい風を一ばいにうけて、同船の人達とおもしろい話に笑ひ興じ乍ら、ゆる／＼と川を上つて、其の時乗つてゐた誰かが言つたやうに馬に引かれて賀來の市參りをしたものだつた。賀來の市がすむと、この邊は次第にさびしくなつてくる。がまた夏の間の賑やかさどちがつた、静かな落着いた氣持を味はせてくれる。

一一、農事試験場

月の美しい秋の夜、貴いまでに清らかな月の光をうけて銀色に光る水の面、澄えた夜空に一際黒く浮き出て見える由布山水のやうに白く月の光が流れてゐるコンクリートの上、橋梁のかけが織り出してゐる黒い模様、の面白さ、かすかな水の音、涼しい風、どこかで虫が鳴いてゐる。こんな静かな氣分も又すてがたいおもむきである。

このたよりはたう／＼明礮橋の事ばかりになつてしまつたが、此の夏、君が來たら僕は先づこの橋に案内して、ポイントでも浮かべ、ゆつくり話したいものだと思つてゐる。

「にいさん、三ヶ田町の四つ角に白い柱が立つてゐますね。あれは何の標ですか」

「ちやんとあれに書いてあるでせう。あれは農事試験場の入口の道しるべだ。あの南大分驛の西に赤い瓦の屋根が見えるでせう。あそこが試験場だ。」

「あゝ、わかつた／＼。僕も二三度あの横を通つたことがあります。新屋の正三さんが毎日行つてゐる所でせう。何時か兄さんも試験場に行つた事があ

りますね。何しに行つたのですか。」

「籾の種を貰ひに行つたのだ。」

「籾の種？試験場のはよい種ですか。」

「よいとも、いろいろ、學問をして、それを實地に研究して、この邊の土地によくあつた種を作つてゐる所だ。」

「その種をどうするのですか。」

「縣下に廣く分けて、大分縣のお米を良くするのだ。今から十年ばかり前までは、大分のお米は大へん評判が悪かつた。神戸や大阪方面に賣り出しても、他の縣とくらべて何時も値段が安かつたのだ。試験場が出来て、良い種が分けられて、今ではめつきり評判がよく、値段も高くなつ

て来た。全く試験場のお蔭さ。」

「お米のことだけ研究するのですか。」

「いや、麥も小麥も豆も野菜もやつてゐる。その外果物や作物の作り方、農具の改良などもやつてゐる。近頃では種畜場と力を協せて家畜の改良にも努めてゐる。種畜場には鶏や豚などが飼つてゐる。西の屋敷に長い建物があるだらう。あそこが種畜場だ。家のレグも此處の雛を買つて来たのだ。すいぶんよく卵を産むだらう。お隣の豚も此處の子豚だ。あんなに太く肥えて今に澤山の子を生むだらう。」

「新屋の正三さんは毎日金ボンタン

の洋服を着て何しに試験場に行くのですか。」

「お前達と同じやうに生徒だ。やつぱり勉強してゐるのだ。」

「學校と同じですか。」

「まあさうだ。あんな人は農業の事を勉強してゐるのだ。一年間一生懸命に農業の事を研究し、實地に働いて一人前のお百姓となるのだ。中には村の農會等のお役人になる人もあるが、多くはそれ／＼の村に歸り家で働くかたは、村の農業を改良して行く。こんな人が多ければ多い程、縣下の農業が榮えて行き、日本の富が増すのだ。」

「なる程、試験場は大切な所ですね。」

一三、大平寺の遺跡

南大平寺は國府に近く南向で暖いので昔は最もお寺等多く建てられて賑かであつたらしい。今はすべて亡んでたゞ地名や古い書物などによつて僅に跡を知る事が出来るだけである。安國山大平寺 天台宗の寺で御本尊は阿彌陀如來である。大平寺の名はこの寺から起つてゐる。今寺屋敷門前の名が残つてゐる。

廣國山清水寺 御本尊は千手觀音

大師(安阿彌作)桓武天皇の延暦年中坂上田村麿蝦夷御征討の日、東山の清水寺觀世音に戦ひ勝ちて目出度凱旋する様御祈りして出發したが、大功をたて都に歸つた後御禮の爲諸國にこの清水寺を建てたさうである。その時この御寺も建てられたが後兵火にかゝつて焼け、觀音は羽屋に移し祀つたさうだ。今羽屋清水氏宅の觀音がそれであるといふ。大平寺に堂の本音羽瀧等の名が残つてゐる。

伽藍大明神 大平寺の守護の神として祭つたらしい古い記録によると、昔日慈覺大師が唐に渡る時摩多羅神に海上無事である事を祈り無事に歸り着いた

後この神を比叡山の麓におまつりした。後諸國にもお祭りする様になつたといふ。

將監寺趾 豊後の第一代の守護職大友左近將監能直公のお墓をまつた寺だといはれてゐる。

大平寺 穴首切堂、角兵衛庵、石佛など古い跡がなかなか多い。

一四、印 鑰 様

下田中の村はづれに古い森がある。この森の中に印鑰様といふ社がある。この社については人のいひ傳へもま

ちく／＼であるが、昔から續いた古い宮である事は確である。豊府岩屋記及大友追記等の古い本によると、今から約七百七十年前豊後の守護職七代大友氏泰は神を敬ふ心の厚い人であつたから、屋形の正門近くにある金藏が丁度鬼門に當つてゐるので、その近くに小さい祠を建て、天神を祭つたといふのである。



印 鑰 様

金藏とは金倉を開く鑰を入れる庫である所から印鑰様と呼ぶようになったが、大友氏が亡んで後は何時からか田中の小野家が年々お祭りをして來たさうである。明治の初頃祭つた神がわからなくなつたので、金袋を持つてゐる大國様を神として祀る様になつたといはれてゐる。

この地を五丁ともいひ、その昔はこの南方に今上野にある金剛寶戒寺が高く聳へてゐたさうで、こゝから花苑、羽屋にかけて大友屋形があつたさうであるが、

今は唯高い樹を鳴らす風の音のみ徒らに聞えて確かな昔のさまを聞く事の出来ないのは残念である。

一五、大分川の今昔

美しい由布が嶺に源を發し、朽網の支流なご合せ、うねりうねつて大分平野に入り我等の郷土を過ぎ七瀬川を合せて東に進み、北にまがつて遂に海に入るのである。この川の育む人口數十萬、大昔から川の恩恵をうけた者は幾百萬人あつたかわからない。

幾百年の長い間には川の流れの遷り變りも驚くばかりで大

昔は賀來村より深河内に流れ、上村、畑中、豊饒の北を過ぎ羽屋の下より南に折れ、更に北東に曲つて、古國府を通り、昔の笠和郷、千手堂町附近で海に注いでゐたらしい。今でも深河内、尼瀬、中ノ瀬、大石等川にちなんだ名があり、此等の土地が著しく低く大雨の時はちやうど大河のやうにここを流れるのを見る。古い本にもある通り確かに川の流れた跡であるさうなづかれる。

此の大分川も昔は古國府附近は、もう海に近く、大波小波が打ち寄せて、大船が自由に出入りしてゐたらしい。まして國府のあつた時代には古國府の河邊はこの附近第一の良港で、都へ鄙へ向ふ旅客が多く乗りおりし、積荷の聲も賑かた、眞帆、片帆、出船、入船うち續き、その賑かな事は例へ様がなかつたこの事である。従つてこの川邊には澤山の名所舊跡が残つてゐて、面白い傳説

悲しい物語、勇しい戦話が我等の血を湧かせてくれるのである。大昔は烏帽子狩衣の國司様が馬上ゆるやかに大勢の家臣をつれて櫻狩した姿や、綺麗に着飾つて舟遊した奥方姫君達のお姿を幾度かこの川のほとりに見られた事であらう。更に天正の頃さなつては大友、島津のはげしい戦に甲冑に身を堅めた武者達が太刀振りかざして川をはさんで追ひつ追はれつ驅廻つた勇壯な姿もこの川水はうつした事であらう。宮瀬、古國府の渡場には徒歩にお駕籠に髪結ひたる様々な姿をした老若男女のこみ合ふ蔭もこの川はうかべた事であらう。

朱塗の太柱美しい高殿長い白壁深い堀に圍れた屋形はては川邊近く此處彼處に立列んだお宮お寺の堂塔伽藍等が青葉若葉の木の間に見えかくれつした有様を思ひ浮べる時我等はち

ようご一卷の長い繪巻物を眺める様である。

あれほど立派な港も今は只海岸遠く小さい漁舟の僅かに三つ四つ五つせ、らぎの間に浮ぶ姿を見うけるのみである。昔の交通の要路宮瀬、尼瀬、古國府の渡場はあれて跡かたもなく、今は工費幾百萬圓をかけた明礮、廣瀬の橋の上には警笛の音高く自動車走つてゐる。

春が訪れて由布、九重の連山は遠く霞にねむる頃、我等の郷土は黄に緑に彩れたり、秋になつて川邊の樹々が紅葉にそむ頃、静かな月夜空を雁が啼き渡つたりしては様々に昔がしのばれるのである。

悠悠として流るゝ大分川はこのいひしれぬなつかしい昔の事をさゝやくかの様に今も靜かに流れてゐる。

一六、初瀬井路

大友氏が上野の西山城に移つてしまつた後町も山北部に移り、南大分は何時かはなく荒れて、一面の藪や畑と變り、麥や粟や野菜の類が作られる様になつてしまつた。

ところが今から凡三百五十年前大友義統が由布川を水源として、約十軒も續く井路を掘つて水を引いた爲だんく水田に變つて行つたさうである。この井路を國井出と呼んでゐた。しかしその後田が非常にふえたので、これだけでは水が足りなくなつて、折角作つた稻も育ちがよくなかつた。之をなげき、さうかして水利をよくし農民の幸福を増したいと考へたのが、徳川時代

の初府内の領主であつた日根野織部正吉明であつた。

吉明は新に大分川を水源とした大きな井路をつくり水の量を増さうと計畫した。けれども大分川はこの南大分の土地より低いので、水の取入口を何處に求めたらよいか、水路はここを通せばよいか等しらべると随分な難工事である事がわかつた。しかし吉明は農民の幸福の爲にはどんな事があつてもこれを完成したいと固く決心した。水源は凡十五軒川上の阿南村に求め



るここに於て工事に取りかゝる事にしたが、吉明は長い月日をかけては却つて失敗するかも知れないと思つて、農家のひまな春に割負請で始めることにした。

時は慶安三年正月十三日雪を戴いた由布・鶴見から吹き下す風は身をさす様につめたい。自分達の水路を作るべく待ちかまへた農民たちは夜もほのく、さ明けの頃から長い井路を一せいに掘り初めた。若い者は勿論老人も女も出て、毎日朝は暗い中から夜は星の出る頃まで一心に働いた。土を掘る者、運ぶ者、石を積む者、山を切取る者、トンネルをうがう者、かんごくをする者、皆力を合せて働く様は、まるで戦場のやうである。出来る、出来る、工事は日に日に進んで、僅か四十五日の後、二月二十八日には見事に完成したのであつた。

全長十五・四軒、働いた人は實に九萬三千二百人の多くで、清水と兵衛、大石、助左衛門の二人が、かんごくにあつたといふ。

工事が終ると、通水を試みた。水路一ばいにみなぎつた水は、さうく、さ流れ出した。吉明のよろこびは一通りでなく、これに初瀬井路と名づけた。農民は小おどりして、よろこび合つた。そして吉明のよい政治を有難がり、祝ひの宴を催した。その時お祝の心をのべて、次の如く歌つた。

幾久し吉明し初瀬川

流を受けて民も榮えむ

水に乏しかつた南大分は、これから今日のやうに一面の青田になつたのである。南大分ばかりでなく、挾間、由布、石城、川賀、來村と大分市全部で九百五十二ヘクタール（九百六十二町歩）の田がこの

井路の御蔭をうけて年々二千七百キロリツトル（二萬五千石）からのお米がされてゐる。吉明の公益事業は實に偉大で年々黄金波うつ秋の田に豊年をよろこぶ我等は吉明の御恩を忘れてはならないであらう。

一七、地藏傳説

(一) 火よけ地藏

豊饒の村の中ほどに小さな御堂がある。その御堂の奥の方に數体の石のお地藏様が静かにならんでゐらつしやるのが見える。この真中の右手に柄杓、左手に手桶を持つてゐるのが、火よけ地藏で、この名がついたには、次のやうな不思議な

言ひ傳へがある。

昔、豊饒の村が出来てあまり久しくない或冬のことである。すさまじい木枯のうなりを聞きながら、村人はやつと眠につかうとしてゐた。

「火事だ、火事だ。」

けた、ましい叫び聲が人々の耳をつきさす様にひびいた。人々が思はずはね起きて外へ出て見たとき、一軒の

家が燃え上らうとしてゐた。かけつけた村人の手で火事は大事にならずにおさまつた。あとかたづけをしてゐる時、さつき「火事だ。」と言つた叫び聲が話の種になつた。誰も叫んで歩いた者はないといふのである。

「不思議な事があればあるものだ。」

人々は夜明近い寒空の下で首をかしいげながら歸つて行つた。

翌朝お地藏様の前を通りかゝつた一人の村人は額から玉の様な汗を流してゐらつしやる變つたお地藏様の姿を見つけた。

「おかしいな、若しかすると昨夜村中を

大聲で叫び歩いたのはこのお地藏様かも知れない。」さう思つた村人は立歸つてその事を告げた。

傳へ聞いた人々は不思議なお地藏様を天晒しにするのはもつたないといつて御堂を建て、安置した。このお蔭か豊饒には昔から火事が極めて少なかつたさうである。

ところがこれを聞いた他村の若者が、このお地藏様を盗んで自分の家の床下にかくした。すると毎晩夜になるとお地藏様は

「豊饒に歸りたい」

とおつしやつて、その人はどうしても

眠られず、遂に又返しに來たさうである。今でも火事のある時には、お地藏様は右手を動かすといはれてゐる。

(二) 十輪庵の地藏

畑中の十輪庵に行くとき境内には一棟の御堂と多くの寶篋院塔お墓などがならんでゐて、何だかゆはれのあるらしい感じがします。この庵は宇治黄蘗山萬福寺に屬するさうですが、御本尊である地藏様について不思議なお話があるので

す。この地にはもと小さな地藏様が祀つてあつたが、餘り信する人もなく、草が生えかゝり、村人は馬繋場としてゐました。

それを一法といふ人が長多く思つて御堂を立て、地藏様を中にまつり自分はその庵主となりました。

或時この一法は村の人々を連れ高野詣をして千手院谷の西生院といふ所に着いて宿をとりました。同道の人々は旅の疲れで皆ねいづまつた夜中、一法はまだ寝ずに經を讀んでゐるとすつと一人の尊い僧があらはれて「これ一法、汝の庵に昨夜盗人がはいつたが長持の錠をねち切らうとして、指を痛め何も盗らずに逃げ出した。盗人は村人で今なほその疵に苦んでゐる。汝は歸りに真土峠によい膏藥があ

りました。

さて歸つて見るとなるほど長持に血がついてゐるやうです。一法は何知らぬ顔をしてゐますと、或日一人の若い者が

「仕事をしてゐる時誤つて怪我をしたが、とてもいたくてたまらない。どうぞ藥をいたゞきたい」と大きくはれた手を痛たさうにさし出しました。一法はつくづく若者の顔を見て

「お前はうそを言つてゐるな。その指がそんなにはれたのは其の御たいりだ。正直に言はねば疵はなほるま

るから買つて歸れ。もし盗人が來たら慈悲をもつてざんげさせ、その膏藥で治してやれ」

と云ひすて、その姿は消えました。夢ではないかと思つたが、歸路真土峠で藥を買ひ無事に府内の濱に着きました。

迎へに出てゐた村人は顔色をかへて「あなた様の留守中に大變な事が……」と話しかけました。さてはと思つた一法は

「わしの留守中に盗人がはいつたんだらう」

と澄ましてゐるので皆は不思議がつて

い
と申しますと若者はサツと顔色を變へ
ました。そしてとう／＼悪い事を正直に
いつてしまひました。一法は

「これからは決して悪い事をしてはい
けぬぞ」

とさとし西生院であつた不思議な話を
して聞せ膏藥を與へました。若者はふる
へ上つて畏れ膏藥をいたゞいてつけま
すと、たちまちなほつてしまひました。

さてこの不思議な御告は地藏様に相
違ない。村人はそれから大さうこの十
輪庵の地藏様を大切にしたりと申します。
(この地藏様は仁聞の作といふ)

(三) 延命地藏

田中から豊饒に行く道に小さな橋
があります。昔そこを大分の殿様大給
公が馬に乗つてお通りになり、この橋
を渡らうとすると馬が急に騒ぎ出し
て遂に落馬されました。その後此處を
通りかゝると又落馬されました。その
次の時にも同じ様な事がありました。
ので不思議に思はれて家來に調べさ
せますと、その橋は地藏様で作つてあ
ることがわかりました。非常に驚いた
殿様は早速お堂を造らせて安置され
ました。

此の地藏様は大さう靈現あらたか

だといふので、お参りする人が多く、明治
になつてから後でも「家中」の方々まで参
詣してゐたさうです。今でも勝音院には
殿様からいたゞいた御墨付が残つてゐ
るさうです。

村人はこの地藏様をお祭する爲、毎年
盆の二十三日には「お通夜」をしてゐます

が、今から二十何年前たゞ一度お通
夜を止めた事がありました。ところが
丁度其の年大火事があつて田中の村
中殆んど全部焼けてしまひました。村
人達は之はきつと地藏様の御とがめ
だといふので、今でも毎年かゞさお
祭をしてゐるさうであります。

一八、若杉直綱

上村の悟眞寺にお参りしますと、其の境内に多くのお墓が立
ちならんでゐます。其の中に「忠誠軒仁空元讓居士」さきざんだお
墓が目につきます。之が勤王の士贈從五位若杉直綱公のお墓で

あります。

直綱は天保四年十月四日今から百年程前大分市大字荏隈字上村に生れたのであります。小さい時から大變かしく又勝氣な人でありました。六才頃から學問を始めましたが、年上の仲間もたくさんあつたが常に第一番をじめてゐました。

十五才の時志を立て、日田に行き廣瀬淡窓の弟子となつて咸宜園に入り大いに學問をはげみ、かたはら武術の稽古をはじめました。が、その進みの早いのに皆驚いたといふことでありました。二十才の時、大阪に出て町田元耕といふ人のもとで醫學を修め、ついで江戸の大城春齊について勉學し、後醫者の業を開きました。

當時我國は大變多事多忙で外からは外國船がいきりに來て

さわがしく、又内では皇室の衰へたのをなげき、國を憂へる勤王憂國の志士がぞくぞくあらはれた時でありました。直綱も其の一人で早くから尊王愛國の心に富み、幕府を倒して皇室の御威光を盛にしたいと考へ醫者の仕事は第二とし、天下の志ある人々を往來して其の折を待つてゐました。

直綱は大事をしようとするれば大きな力がなくてはならない、それには勢力のある殿様の力をかるのが一番便利である。と考へ志をきめて大阪から長門に行きました。

其の時長門藩では三條實美以下七人の公卿が都から落ちのびて來るし、殿様も罪を得て任を解かれた時でありました。藩の人々は大に心配し其の罪のお許しを願ふ爲に兵を率ゐて京都に上りました。直綱は同志と共に京都に上り長州兵に加はりま

した。

文久三年七月十八日の夜、長州兵は天皇様に罪のお許しを願ふ爲に無理に京都に入らうとして御所を守つてゐた會津桑名の軍と衝突し各所ではげしい戦が起りました。中でも蛤御門附近の戦は最もはげしく長州の來島又兵衛の率ゐる軍は遂に之を破り公家門に突入しました。直綱もこの一隊に加はり右に左に馳けまはつて戦ひ非常な手柄をたてました。所が突然薩摩の小松帶刀の一隊が横よりあらはれ盛んに大砲で撃つたのです。不意をうたれて來島以下はほんご戦死し長州の兵は御門の外になだれをうつて逃げ去ります。直綱は味方の大勢をもりかへさうと大太刀をひきぬいて敵陣につき入ります。氷の刀がきつさきをそろへて行手をさへぎりしました。おごり上つた直綱

は掛聲もろごもまた、く間に數名を斬り倒したが味方の勢は益々わるくなるばかり、遂に直綱は敵にかこまれてしまつたのです。心ばかりははやれごも非常につかれた。直綱は遂に敵の打ち下す太刀をかはずみにごうごころげたのです。續いてふり下された二の太刀に肩先を深く斬り下げられました。直綱はなほも屈せず立ち上り様その敵を薙ぎ倒し勇をふるつて戦ひました。が多勢に無勢遂に十九日の朝がほの白む頃見事な討死をしてしまひました。年はまだ三十二才でありました。

後明治天皇は直綱の精神をおほめになり從五位の位を賜はりました。

こんな偉い人がこの土地から出たのであります。ごうぞ皆さんは常に直綱をお手本とし忠君愛國の心を振ひ興して下さい。

一九、岩屋寺

我國に佛教が傳つた年(二二二)から凡そ三十年ばかり経つた第三十代敏達天皇の十二年に百濟の僧日羅が我國の使者吉備羽鳥に随つて都に上る途中、大分を通り上野龍ヶ鼻の所の崖がさきり立つてゐるのを見て、眞に立派な土地だと感じてその崖に薬師佛二光大士及び十二神將を刻みつけ、寺を建立し岩屋寺と名づけた。

此の寺はすぐ近くに國司の館があつた爲非常に榮え境内は、東は元町岩薬師

附近より西は彌榮神社の下の鐵道踏切附近までつゞいて廣さは凡そ二千アール程あり、本堂は今の國道より利根醫院の附近まであつたといはれてゐる。かうして數百年榮えて行つたが、嘉元三年大友貞親(五代)がその名を總社山圓壽寺と改めて上野六坊に移したため、この岩屋寺は見るかげもなくすたれて、唯そのあとだと言傳へられてゐる。岩聖庵といふ祠が古國府の鐵道線路の下に小さくまつられてゐる。此の岩聖庵も明治七年頃までは立派な庵で延明といふ尼僧がゐたさうだが、其の後火事のため焼けて今の通

りになつたといふ。

なほこの近くの竹藪の中に「閼伽の井」といふ目薬になるお水が湧く井戸があつたさうである。それには次の様な傳説がある。

日羅が岩屋寺を開く時此の邊一帶の水は鹹くて困つた。そこで或日佛にお祈りして岩を掘つたところ、忽ち清水が湧出した。人々は御佛の下さつた水だといつて閼伽の井とよび此の里を閼伽井里といつたさうである。其の後此の水は不思議な水だと云つて明治の始め頃まで人々がお水としていたゞき目薬にしたさうである。

今はその井戸も大湯線を造る時こわされてあともなくなつた。

二〇、龍ヶ鼻の石佛(十二神將)

新しく出來た廣瀬橋を渡つて古國府の東端にある祇園橋に着いた。色づきかけた櫓が午後の日に照つてゐる。太郎はふと右側の岩壁にある石佛を見て

「お父さんあれが有名な石佛ですね。行つて見ませう。」
父は石佛の前にぬかづいて一々眺めてゐたがやがて、

「惜しいことだなあ、こんなになつてしまつて」

と云ふと太郎は

「何せ惜しいのですか」

「この石佛は大變古いものだ。お前も國史で教つただらうが、聖武天皇で名高い奈良時代から平安時代の初頃にかけて作られたらしいといはれてゐる。佛教が百済や唐から渡つて來たため、御佛をさむことが行はれた。何でもその頃の傑い坊さんや佛像師が一心にきざんだ作らしいのだ。その上これは日本でも非常に珍らしく、東植田の高瀬や、白杵の深田にある石佛と共に有名なのだ。こんな立

派な彫刻が長い間に顧られず風雨にさらされてこんなにかわけてしまつた。それが近頃大切なことがわかり、『史蹟名勝天然記念物』として法律の力で保存されるやうになつたのだ。」

太郎は千年以上も前に出來たのだと知ると、何んもなく尊い氣がして一々ていいいにおがんで行つた。

「お父さんこの一番右のがよくわかるね、何んといふ佛ですか。」

「それは阿彌陀如來の侍者で、大慈大悲を以て一切衆生を利するといふ一面觀世音菩薩だ。學者の調べたところでは、作風が大体に奈良朝の初期養

老前後のものと言はれてゐる。形もわり

あひよくのこり、それによく整つて實に立派な出來だから、豊後の石佛中でもすいれたものゝ一つださうだ。」

「頭の上に丸い様なものがたくさんあるのは何ですか。」

「あれはね、數十箇の小佛のお顔で、正面のお顔と共に十一面あるから十一面觀音と言ふので、印度、西藏、ネパール、支那、日本等では大變違つてゐて六觀音、七觀音、三十三觀音などの名があるが、これはその中で七觀音中に入るものだ。小佛は或は怒り、或は笑ひ、或は威張といふ風に色々な心を現はして作られてゐるのだ。」

「大變面白いですね、よく千手觀音なご聞かれましたか。」

「佛の御慈悲をあらはしたものだらうね、それも奈良朝頃までは二手が普通であつたのだが、四本とか八本と多くなり、遂に千手となつた觀音が出來たのだ。」

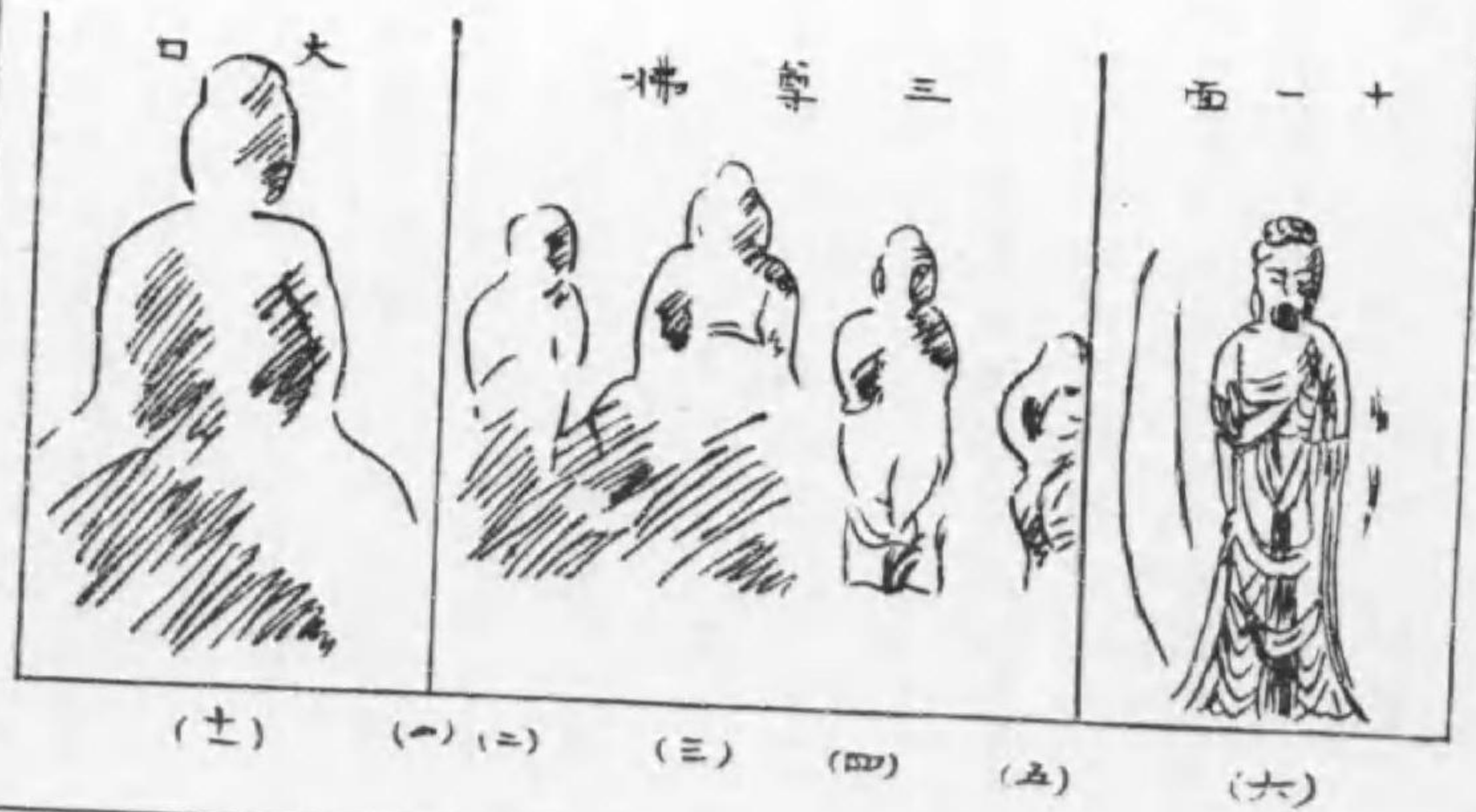
「左の方にたくさん竝んでゐるのは皆佛ですか。」

「さうだいくつあるか數へてごらん」
「二、三……十六。十一面觀音を入れて十七ありますね。あら、この觀音の隣の五つの像は外のより少し高いところに居る様ですが、三尊佛の圖参照」

「それはよいところに気がついた。この一集團は釋迦か藥師の三尊で、向つて左に一つと右の半分残つてゐるものとで一團になる。二番目と四番目が脇侍で、五番目のは四天王の一人である。多聞天で、右手を腰にして刀劔を持った姿勢らしく、胸に甲冑の形が幽かに見えるだらう。」

「この突き出たところの大きいのと、それから左側にあるものについてお話して下さい。」

「この大きいのは頭と胸と左腕がかすかに見えるが、高い臺座上に結跏趺坐してゐられる。如來の像であらう。十一面を除く他像のうちで最初に刻み出したものであらうと云はれてゐる。上から地面までは約三米もある。次にこの一番左から七番目の佛は、三番目から十番目までの佛の中心となる像であるが、



こんなにははれて、今は何像であるかはつきりしない。五番と九番がこの像の脇侍日光月光で、三番が多聞天で甲冑をつけ劔をつけてゐる。十番が不動明王であらう。次にこの四番と六番の像は後に刻んだものらしいといはれてゐる。なせだか考へてごらん。」

「僕にはわからない教へて下さい。」

「それはね、頭のまわりに圓くある光背が陰刻になつてゐることと、軀がせまくるしいやうに彫られてゐることなどでよくわかるのだ。この一番と二番はやはり浮刻のものと思はれるが、外の佛と趣がちがひまづい刻りであるやうだ。」

「この屋根の上から竹の根が延びてゐますが、雨がつたり風でこわされたりしてはこの石佛も益々跡を消すことでせうね。」

三尊佛並諸脇侍



「さうだも少し大切にしてほしいものだ昔の古國府附近はどんなにかにぎやかなところであつたらう。そのころの遺物として尊いこの石佛を大事にしなればならない。」

「この石佛を十二神將といふのはなせですか」

「それは別にいはれはない。唯昔からさういひ傳へられて來たらしいね。」

「一体この石佛は誰が刻んだのでせう。」

「古い本を見ると第三十代敏達天皇の御代に百濟の僧日羅があつた。元町の岩樂師と一緒に彫んだと書いてあるが、それも疑はしいさうだ。今から二十年程前京

都帝大の先生方も見えてくわしく調べて、日羅よりも大分後の彫刻である事はわかつたが誰が作つたかははつきりしないさうだ。たゞ岩樂師などと同じ奈良朝か平安朝の初頃誰か偉い坊さん等が刻んだのだと思つていゝだらうね。」

夕日がゆるく斜にさして來て、つきり御佛の片側に陰をつけてゐる。銀杏の葉がかさくと散つて來て、うすら寒い。印鑰様の森も碓島も夕靄の中に淡く浮かんで見える。

二二、龍ヶ鼻の傳説

庄の原の臺地から長く上野ヶ丘まで連つて、大分市の交通を阻げてゐる丘。これは其の昔龍であつたといふ。そしてうねりうねつて、其の尾は遠く久留米の處、高良山まで達してゐるとのことである。今國幣社として名高い高良神社のある所を龍の尾といふが、それはこれからきたものださうである。
従つて上野の端が龍の頭にあたる方で龍ヶ鼻といはれる。こゝにも高良神社があるがそれは極小さい祠である。村の

老人たちは多分久留米のを勸請したものであらうといつてゐる。
何時頃かまでは龍は生きてゐて削るごとに赤い血を流したといふ時や上野の掘割を作つた時にも血が出たといはれてゐる。

二三、交通

今日私共が僅かの日數と貨錢で貨物を送つたり旅行したり又東京大阪等のやうな遠い所で起つたことでもすぐ知る事の出來るのは皆交通機關が発達した御蔭であります。この様に

遠い所へ物を送つたり、人々が往來したり或は通信したりすることを交通といひます。

交通は色々の産業と深い關係があり、ますので産業を興して、商工業を盛にしようと思へば、さうしてもこの交通機關を立派に設備しなければなりません。

交通する路は一直線であることが最もよいのですが、土地の高低や海岸の出入等によつて、右に左に曲ります。それで山脈の間や河の流れ等にそふて進みます。大湯線が元町から古國府南大平寺永興と山に並んで走つてゐることや、大分、久住線の縣道が三ヶ田町、竹ノ上、深河内、賀

來と大体に大分川の近くを通つてゐるやうなものです。しかしやむを得ない時には、山脈なり河なりを横ざります。例へば大分熊本線の縣道が峠の掘割を過ぎて、明礮橋を渡り、又國道第三號線が上野の山を越えて、古國府から廣瀬橋を経て瀧尾村の方へ通じてゐるやうなものであります。

通信は運輸機關の發達するに従つて完備するものであります。通信機關は特に商工業と密接な關係をもつものであります。我南大分にも既に四十餘の電話と六十に近いラヂオが取附けられてゐますが、その中半数以上を

三ヶ田町が占めてゐることから考へて、如何に商工業に深い關係をもつてゐるかを知らることが出来ませう。

次に今少し南大分の鐵道と道路について申しませう。

大正五年の秋、當時下田中の小野駿一氏が社長であつた大湯鐵道株式會社が大分から小野屋まで小さな輕便鐵道を敷きました。これが今の大湯線で、開通した時私共は非常に汽車の便利を感じました。それが大正十一年の十二月政府に買上げられて、線路も驛舎もよくなり、今日のやうになつたのです。今南大分の驛には木材や米や青筵等が山のやうに積

まれてゐます。これ等の貨物は汽車に乗せられて、遠く各地に送られます。なほ今年の秋、日田郡天ヶ瀬、夜明間の鐵道が開通すれば、名も久大線と改まり、大分久留米間の交通が一層便利になるわけです。

道路は前申した様に一つの國道と二つの縣道とが幹線で、その間を東西に南北に市道が連つてゐて、日に二百回近くも自動車を通つてゐます。この上將來計畫されてゐる廣瀬橋から下田中、羽屋、田中を過ぎて賀來に至る線、下田中から畑中を通つて明礮へ出る線、南大分驛から明礮へ又旭町から二

又豊饒畑中をつらねる線等が完成し市内電車も通じたら南大分の交通はいよ

いよ便利となつて大きな工場等が建ち産業も益々盛んとなることせう。

二三、三角畑の變

「誠に大膳大夫にも困つたものぢや」
 親著公はうれはしく眼をあげて重臣阿南惟定を見た。窓の外ではチラ／＼と櫻が散つて遠く靈山が霞の中にほんのり見える。春さいふのに親著の心は暗かつた。
 彼の後を継ぎ第十二代豊後の守護となるべき長男の大膳大夫孝親は生れつき短氣で、性質が荒く、學問はきらひ、亂暴はする、驕りたかふつて實に手に負へなかつた。それにひきかへ、二男花市丸は賢明でおごなく、昨年元服して親綱と名乗つてから一

層偉さを増した様に見える。親著公はだん／＼孝親をみかぎり、深く花市丸を愛し、後目は彼に嗣がせようさへ考へるに至つた。今日はその事を西山城の大奥でひそかに重臣惟定に謀つてゐるのである。

「予は行く／＼は、花市を世嗣と定める」

きつぱり親著は言つて惟定を見た。惟定は深くうなづいて頭を下げた。

生れつき氣の荒い孝親は此の事を漏れ聞くと、狂はんばかりにいきどほつた。

「おのれ、ごうするか、見てをれ」

その日から彼の行は凶暴の度を増して如何に重臣が諫めても聞かなかつた。悪臣共はたくらんでこの主人をそゝのかした。

そして町に出でから、威張りに威張りちらし、氣に入らねば無禮討にする位何でもなかつた。府内の町民は恐れおのゝいた。かうしてその年も冬が來た。

こゝに戸次采女×といふ若い侍がゐた。身のたけ高く力すぐれ、小太刀を取れば家臣中彼の右に出る者はなかつた。しかも學問にも秀でて正義を愛し決してよこしまな事をしなかつた。だから年こそ若い皆彼を畏敬してゐた。この采女も御家の行末を案じる一人であつた。

「このまゝ過せば大友家は亡びるであらう。今日こそ主家に忠義を盡すべき時が來たのだ。よし殺されるごも、家來として孝親公を切に諫め、よき殿にお直し申さねばならぬ。だが……若

し御聞入れなき時は畏多き事ながら孝親公を刺殺し、命は捨て、も御家をすくひ奉らう。」
采女は深く決した。そして家來十四人を引き具して馬にのり孝親の館に向つた。

「采女の申す事何卒御聞き下さりませ」
彼は決心の色を面にあらはし、昔からの名君や良將の例まで引いて、惇々×と行を改める事を説いた。彼は鐵をも溶かす熱血を体に感じ涙は止めごもなく流れた。この身は入さきにされるごも、この君を正しい道に歸さねばおかぬと考へた。
然しあさましくも孝親公の顔色は變り、こめかみの所がびりく、怒りの爲にふるへてゐる。大衾の上にふんばつた片膝に

ぶるく、ふるふる拳を握りかため、口は固くむすんで、一言も發せず、采女を太い目でにらみつけながら今にも飛びつかん勢であつた。襖の向には殺氣がみなぎつて、確かに數十名の家臣が刀の鯉口を切つてゐるらしい。采女はしかし動じなかつた。

「殿：何卒采女が申し上げること……」
一段と力をこめて言はんとした時、つゝ立上つた孝親は荒らかに襖をけ開け、足音高く奥の間に入つてしまつた。

「あゝ、今はこれまでだ。」
采女は力もぬけてしばし頭を擧げ得なかつたが、つゝ立上つて御殿を退いた。彼の顔は青く、死んでしまひたいといふ風だつた。待つてゐた家來はギョツとしたが靜かにお伴をして寶戒寺跡から印鑰の森をぬけ、三角畑の方へと暗い冬の夜道を淋しく照

らしながら従つた。

「ものごも、不埒なる采女討取つて參れ」

采女が御殿を退くに見るや、孝親は怒にふるへた聲で叫んだ。待ちかまへた數十名の悪臣共は手に、手に刀や槍をおつとつて門から走り出て采女のあとを追つた。そして三角畑はたちまち血の雨のふる場所と變つてしまつた。

采女はかうなる事を心に期してゐたので、少しもさわがず馬を返して戦つた。忽ち十數名は斬りふせたが、暗い闇ではあり味方も次々と討たれて行つた。何さかしてこの悪臣共はみなごろしにしてから死なうと心のみははやつたが、闇の中からひらめいた槍をよけ得ず、あはれ切りさいなまれて道の側に倒れてし

まつた。悪臣共は血をぬぐうて引上げようとした。

その日親著公は家臣を伴ひ植田郷に行つてゐて、この騒を知らなかつた。おそく西山の屋形に歸るべく御駕籠を急がしてゐる。たゞならぬ斬合の聲が闇をつんざいて聞えて來た。親著公は家臣に向つていつた。

「何者ぞ、早く取り静めよ。」

かけつける從臣を見るや、血にくるつた悪臣共は又々拔刀して斬りつけて來た。すは殿の御大事と重臣阿南惟定は、

「大殿の御行列なるぞ。血まよつたか。」

と聲をかぎりに制したが、遂に刀をぬき合せねばならなくなつた。そしてこゝを必死と戦つたが遂に斬り立てられて重傷をう

けのけざまになぎ倒された。そして十一代式部大輔親著も無斬にも悪臣の刃にかゝり最後をさげてしまつた。

この事は直ちに孝親の館に報ぜられた。

「しまつた。」

いぢびるをかんだ流石の孝親も事の意外にしばし憫然となつたが、親殺しの大罪に最早やのがれぬ處と腹かききつて自殺して相果てた。

時は應永三十三年十一月二十九日（足利將軍義持の頃）であつた。其の後花市丸（親綱）は持直親隆と共に悪臣を討ち平げ、父の討たれた場所には八幡宮をまつたといふ。

二四、彌榮神社

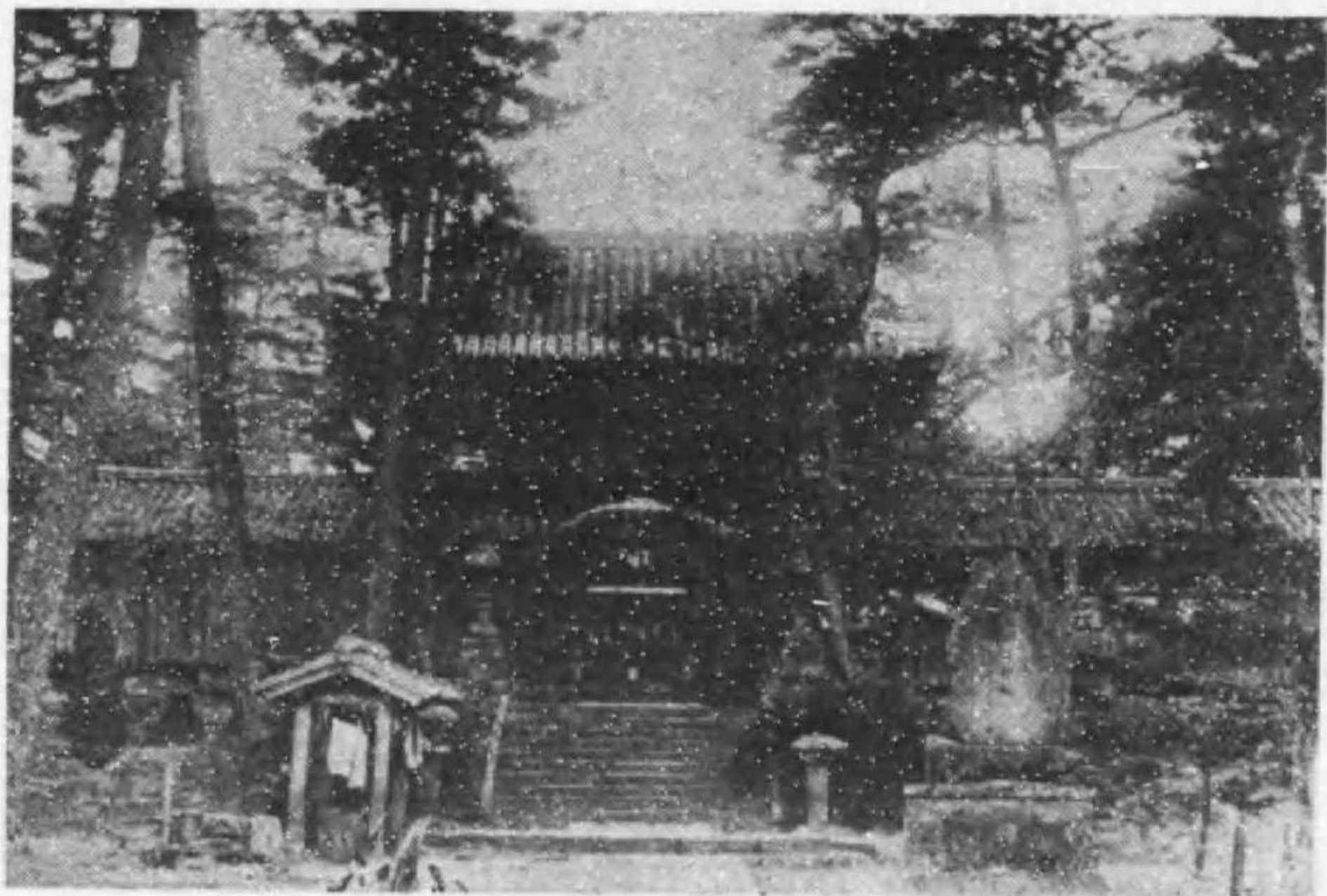
上野ヶ丘の老松の茂つた間に私共の氏神様彌榮神社が神々しく鎮まつておいでます。長い参道を上つて神前にぬかづき後をふりかへつて見ると、眼の下に大分川沿岸の沃野が遠く靈山の麓まで廣々とひらけて、實によい眺めであります。

彌榮神社は神代の武神素盞鳴尊及び因幡の白兔で私共の知つてゐる大國主命即ち大己貴命並に奇稻田姫の御三方を御祭神としてまつたお宮であります。

今から凡そ一千百七十餘年前に我日本全國に疫病が流行した事がありました。時の天皇は深く人民の事を御あはれみになつて此の悪い病をなくし、國民の苦しみを救はうと御考へになつて、全國に一ヶ所の疫よけの神様を御祀りになりました。之が彌榮神社の始りであります。時に人皇第四十九代光仁天皇の寶龜元年六月十五日でありました。

かくて彌榮神社は元和の始め頃までは、上野の笠坂に鎮座しましたのであります。所が元和の頃に、此の府内即ち大分の地にも疫病が流行して、時

の城主竹中采女正一家の人々も皆此の悪病に罹られました。そこで殿様はすぐに、此の神社へ平癒の祈願をなさいますと、靈驗が直ちにあらはれて全く回癒されました。そこで殿様は此の御神靈をおそれおほく感せられて、使を京都に上らせ、祇園社の御分靈を受けさせました。それでこれから後この宮を彌榮神社と申上げる様



(社 神 榮 彌)

になりました。そして神殿も今の地上野西山に立派に造営されました。元和三年九月起工し翌年出来上りました。樓門は寛永元年に立ちました。

彌榮神社のお祭りは新暦の七月十五日に行はれますが、此のお祭はもと國祭(豊後の國の祭)といつて、國主即ち殿様から祭費をさし上げお祭をし

てゐたのであります。それで祭の當日には城中から警固四名、御尾前十名、殿十名、都合二十四名の役人が来て、いとも嚴かに行はれたものであります。そして四日四晩を御旅所で、賑かにお過し遊ばされて、五日目にお歸りになつたとの事である。頃の御旅所は祇園嶺でありました。祇園嶺といふのは今の利根醫院の下であります。が文久の始頃に八坂橋に御旅所が移されてから、此所へ明治五年まで御神幸あらせられました。八坂橋とは今の分地方裁判所の近くにあつた橋です。此のお祭は實に賑かなもので古國府から六坊、東新町、米屋町、於北町と長い沿道

を大きな引山が十何臺と連り、笛、太鼓の音勇ましく鳴りひやかせて、山の上では美しく着かざつた舞姫が手品よく舞を舞ひつゝ、多くの氏子の人々に引かれて、神のおともをして、しづくどねり行かれたものであります。若しも其の後御神幸が引きつゞき行はれたものなら、實に大分市唯一の名物となつてゐたものでありませうが、明治五年此の御神幸は取り止めとなり、あくる六年からは御旅所は今の廣瀬橋大通りと變へられたのであります。今でも祇園様のお祭は賑かなもので、名物の花火は斷間なく打ち上げられ、

客を呼ぶ露店は所せまきまで立ち並び、午後日も次第に西の山へ近づく頃になると、浴衣姿の人々が風扇片手に三々五々と打ち連れたつて、大分川畔のお旅所へと集まつて來ます。そして渡り拍子も賑かに御三体の御輿をねりまはつて夏の夜のふけるのも知らず賑かに楽しく

過します。此の賑かなお祭へお参りする毎に、昔の事が思ひ出されて、若し今も昔の様に町へ御神幸あらせられるのであつたら、どんなに賑かであらうかと思はれて實においしい氣が致します。

二五、疣地藏

手や足にみにくい疣の出來た時、お参りして「疣を落して下さい。」とお願いすれば綺麗によくして下さる。こいふ疣地藏様を知つてゐるでせう。あの深河内の裏の山にありますね。今からその

お話を致しませう。

さてこの山は尼ヶ城といつてあの峻しいがけの上には古いお城の趾があるのです。

昔第七十六代近衛天皇の御代に源為朝といふえらい武士が
ありました都からはるばる九州を征伐に来て植田村雄城の臺
に城を築いて館ごしました其の時お母さんの爲めに、この尼ヶ
城(深河内臺地)を造つて住はせたのです。

爲朝は戦が強く植田にゐた鬼といはれる八町礫の紀平次を
せめて家來ごしてごんぐ四方を征伐しましたので皆は宮さ
んご尊び畏れてゐましたしかし爲朝はやさしい人でよく川を
渡つてお母さんを訪ふたさうですお母さんは尼さんでしたが
又時々川を渡つて爲朝の雄城に行きました今でも宮が瀬、尼瀬

ごいふのは其時渡つた所だごいひます。

此の尼ヶ城をこしらへた時城の鬼門除ごして、一寸八分の黄
金の佛様をお祀しましたこれが今の疣地藏の御本尊であるご、
傳へられてゐます當時殊更に御堂を建てたのではなく、場所も
大變狭く小さな洞穴にお祀したさうですしかし其の後幾年も
く經つ中に、荒れはてしまひ、佛様は地中深くうもつてたご、
洞穴ばかり残つたのであります。

その後此の洞穴の中から銀の白蛇がしばしば現はれるごい
ふ事が村の人たちのうはさの種になつて來ましたはつきりご
見た人ごてはないが、これが村人たちの心を引いて、それは黄金
佛の御化身であらうご、道をわけてお参りする者が多くなり、黄
金佛の代りごして石の地藏様をお祀するごになりました。

此の地藏様が何時頃から疣地蔵と稱へられる様になつたかははつきりしないが、願ひして疣が落ちたと喜ぶ人は數かぎりもありませんので、参詣者は常に絶えません。

皆さんの中で、疣地蔵様にお参りした人は見たでせう。屋根に釘拔の紋所をきざみつけてある地蔵様を、昔府内(大分)の殿様のお乗りになる馬の脚に、たくさんの疣が出来ました。そこで疣地蔵様にお願ひしますと、其の後いつとはなく、一つ落ち二つ落ちて、さうく、よくなつてしまひました。殿様は大變およろこびになつて、お禮のしるしに地蔵様をきざんでお祀したのがそれだ。と傳へられてゐます。この様におかげを受けた人々のおあげした、地蔵様と言はれるのがこの外にもたくさんならんでゐます。

一心こめてお願ひすれば、疣ばかりでなく種々の病氣も治るさうで、次の様なお話もあります。

大へん重い眼病にかゝつて醫者といふ醫者には皆んな見ていたゞいたが、もうめくらになるより外仕方はないと見はなされた子供がゐました。お母さんは大變心をいためて、此の上は神佛にお願ひしてでも、どうかして治してやりたいと決心し、子供をつれて此の疣地蔵様にお参りを始めました。

それから胸をつく様な、そして淋しいあの坂道を雨の夜も、風の夜も一日さしてかゝした事はありませんでした。然し目は少しも開かずさうく、満願の日になつてしまひました。その夜は大雨大風、實に天地もくつがへされる程の大時化です。しかし慈しみ深い母親は、重い体を背に負ふて、地蔵様へ急ぎました。

一寸先も見えない眞の闇、その上山は崩れて道をふさぐ、さぐりさぐりて漸く辿りつき、いつもの様に一心こめて、お祈をはじめました。いのりにいのつて明方近くぬかづいてゐた子供がふさ顔を上げる。不思議も、不思議、今の今まで腫れつぶれてゐた両眼は忽ちあいたのです。お母さん「眼があいたく」さうれしさのあまり大聲をあげてさけびました。母も驚いてさびつき有難涙にむせんで二人は抱合ひ雨の中に、久しい間地藏様にお禮を述べました。

これからますますお参りする人がふえたご申します。

二六、水産試験場養魚池

「お父さん家の鯉は随分大きくなつたね。」

「さうだね。鯉はなか／＼元気な魚だ。一昨年試験場から分けて貰つた時は二、三位しかなかつたのだが、もう十五糎以上にもなつてゐるのがあるだらう。」

「試験場の鯉は誰にでも分けてくれるのですか。」

「誰にでも分けてくれる。試験場は毎年三十萬から四十萬の鯉を育てるさうだ。それをほとんど縣下の鯉を飼ふ人に分

けてあげるのださうだ。年によつてはその鯉の子がたくさん残ることがある。するとのこつた鯉は川に放すことになつてゐる。大分川、大野川、番匠川、山國川、三隈川、玖珠川が縣下でも主に放される川ださうだ。川に放された鯉は自由に育つてそんな川に繁殖するのです。試験場が出来て大分縣で鯉を飼ふ事が盛んになつて来た。その中で大分郡が第一位で、北海道、大野、直入郡の順になつてゐるのださうだ。大分市も追々盛んになるでせう。」

「鯉は何時頃卵を産むのですか。」

「春です。櫻の花の咲く頃たいいてい

匹の親が二三百の卵を産むさうでその卵を試験場につとめてゐる人が育てるのだ。學校に行く途中見えるだらう。あの幾つものしきつた池があるね。あの中で育てるのです。鯉を育てるのにも色々な苦心があるさうで特に鯉の餌になるみぢんこ、理科で習つたぐらう、あのみぢんこをつくるのに非常な手間がかかるさうだ。又水の温度や餌の加減、天氣の具合によつて育ちが大變ちがふから何時もこれ等に氣をつけなければならぬさうだ。もしあやまると何萬ともしれぬ鯉が死んで、一時に水面に浮び上る事があるさうだ。

「何時かの朝、池の面が眞赤になつてゐた事があつた。あれは何でせうか。」
「あれは水面に出来る藻の一種で、浮草と同じものなのだ。朝出来て翌日は枯れてしまふといふ命の短い水草ださうだ。」

「鯉の外に何か飼つてゐませんか。」
「飼つてゐる。スツンや食用蛙を飼つてゐるさうだ。」

「食用蛙とはどんな蛙ですか。」
「蛙の一種だが人が飼つて大きくしそれを料理して食べるのだ。赤色で普通のよりすつと大きい形をしてゐる。大變うまいさうだ。北米あたりでは、も

う早くから養殖されてゐたのだ。日本のもアメリカ産ださうで、年を追つて盛んになりやがては廣くお魚のやうに食べられる様になるだらう。」

二七、面白い風習

(一) 尼ヶ瀬の縄引

昔から尼ヶ瀬の縄引といふ面白い行事があります。それは盆の十六日になると、尼ヶ瀬の青年が主となつて村中の人々が總出で、周り四五十センチ、長さ四十米もある大きな竹縄を作るのである。竹やぶから大きな竹を切つて来て、それを

打ち割り、わらにませてなひこむのであるから、大へんなさわざである。年寄や子供まで寄つてたかつてやつと出来る。

夕方になると、大蛇の様な太い縄を、恵比須様の近所から東の方へ道の中に置いておく。夕食後になると、近所の村から集つて来た何百人とも知れない青年達が一方となり、村人と敵味方に分れて縄の両側につくのである。この勇しい縄引を見物しようと思つて集つて来る人々で、村中大賑である。やがて道の両側が身動きも出来ない程の人山でかこまれる頃、掛聲勇しく引合が始

まる。この勝負はどんな事があつても決して村人達が負けてはならないのであるから、ほんどに真剣なものである。二時間も三時間もかゝつてなかく勝負がつかない。どうくこの大きな縄も中から切れて終ふ。するとその切れを持った青年達はにげるのであるが、どこまで行つても村人達は追ひかけて取りかへさなければならぬ。或時は川の中までおひこんで取り歸ることもあるさうである。さうしてその縄は全部恵比須様のほこらの前にうづ高く納められるのである。

この行事が終ると集つた人々で西福

寺の境内は、夜おそくまで踊に花が咲くさうである。不思議なことには此の行事を一年でも止める。村中の馬の足がいたむさうで今でも行はれてゐるとのことである。

(二) 田中の火焼地藏

田中の勝音院の裏の小道に添つた所に、首も手足も見えない様に壊れて眞黒く焼けた石像が立つてゐらつしやる。これが火焼地藏であります。昔からこのお地藏様は牛馬の神様で、此のお地藏を焼いてお供養をすれば、牛や馬が病氣にかゝらぬと言はれる。

てゐるので、古い行事の一つとして、今尚行はれてゐます。明治の始め頃までは、永興と田中の境である今の板山米屋と、鷲尾豆腐屋の西と東に小さい塚があつたさうで、それを中心とし、盆(舊七月)の十七日の夜、田中の各戸から、明松一本宛を持つて来て、その塚より二又邊まで萬燈籠をともし、明松を振り廻しながら勝音院へと歸つて行つたのである。その明松や燈の光が闇の中にかゞやいてその美しさや賑かさは例へやうもありませんでした。

明松を振りまはしく歸つて来た人々は、此の火焼地藏を中心に「エーイパー

イ、セウバンシヨ、トキノ聲ハリモドセ」と囃しやぎながら、明松をさかさにして、地藏様に立て掛けなげかけます。すると、火勢はますます強くなつて、焔は天をも焦すばかりに、勇しく物すごかつたと言ひます。

今では村の子供達が各戸から麥からの大束を、一束づつ持ち寄つて、お地藏様を中にして、山のやうに積みかさねて、「エーイパーイ、セウバンシヨ、トキノ聲ハリモドセ」と囃しながら焼きます。火が衰へると、又麥からを投げ入れてお地藏様から油汗が流れる様になると止めるさうです。

二八、丸 山

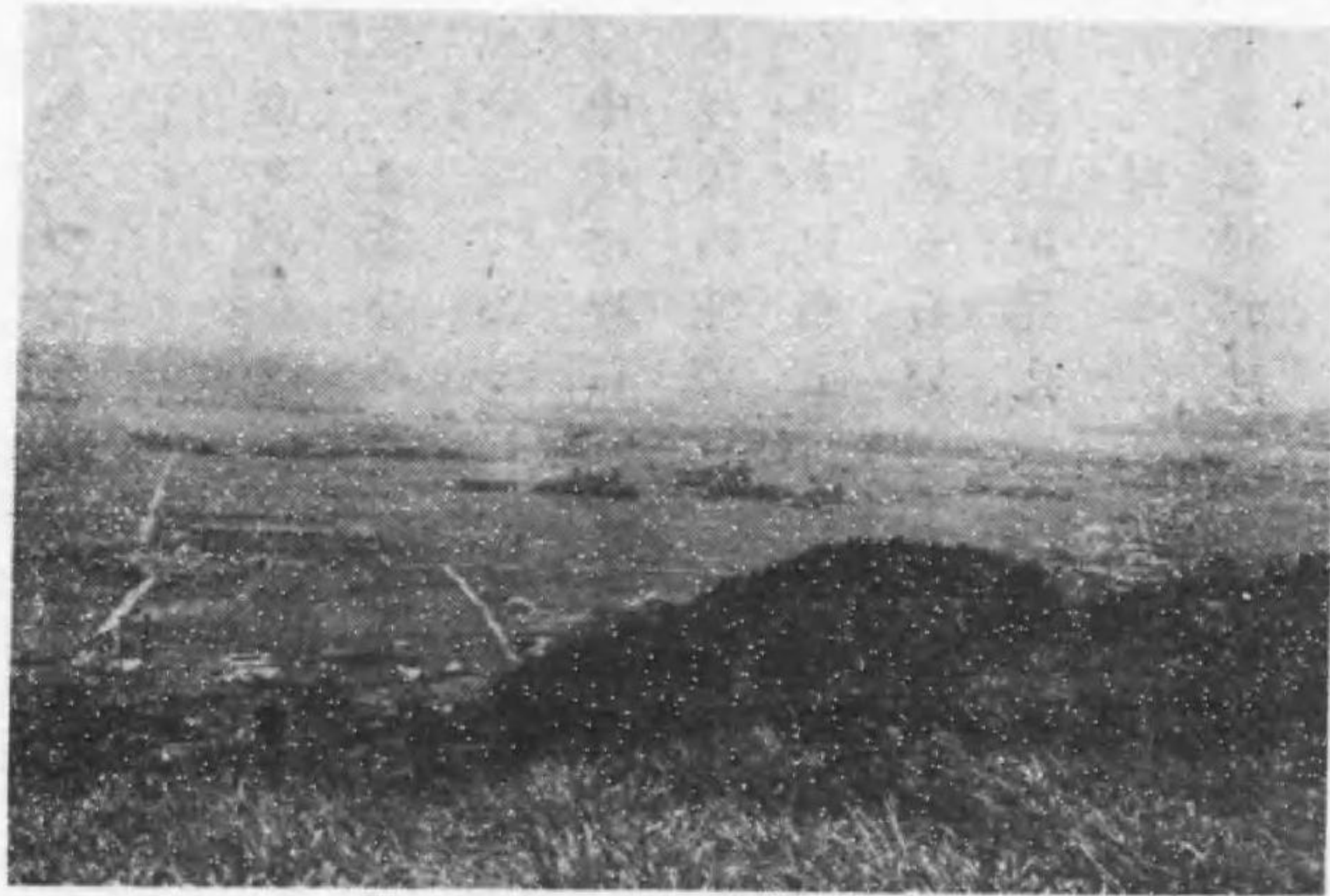
青空の所々に白い綿雲が三つ四つぼんやり浮んでゐて、二三日前まで吹いてゐた風が、死んだ様にすつかり止んでばかりか、かぼかと暖い日がつゞく。こんな日よく私は丸山の頂のやはらかい草の上に腰を下して、眼の下にひろがつてゐる大分市の家々や、ぼんやりかすんで眠つてゐる様な海を眺めることがある。

庄の原の方につゞいてゐる丘の向ふ、高くそびへて由布と鶴見のきれいな姿が見え、其の右下に少し低く緑色の丸い

頂を持つた高崎山の姿も、なんとなくなつかしく思はれる。眼の下の大道町から北に、東に、西に弓なりの海岸線の松林にまでひろがつて居る大分市の家々の屋根、屋根、赤土を掘りくづして出来た浄水地の真白い建物と、陽の光に時々きら／＼と光る四角な水面、その向ふにひろがつてゐる練兵場の緑色の原つば、黒い色の瓦の波の中に、きは立つて見える白い農工銀行と、うす黄色の教育會館と、ちらも近頃出来上つたばかりの新しい洋館である。

濃い緑色の松の木の間に見える縣廳の赤い屋根、師範學校の建物の右側に

茂つてゐるのは春日神社の森だ。其向ふ、静な豊後灣の波の中に、赤と白の可愛い燈臺が長い石だゝみの尖に向ひ合つて立つてゐる。夜になると赤い灯と青い灯が代りばんこに、ついでには消えついでには消えするのだが、今見ると何だかたゞのおもちやの様な気がする。海にはぼんやりと白帆が二つ三つ動いて居るのか止つてゐる



丸山よ見たりたる大雨分

のか分らない様だ。國東半島はうすく煙つて、左から右へ細長い姿を見せ、眼を右に向けると、あゝ、あの丘の上には煙をはいてゐるのは、佐賀關の煙突だ。そよ／＼と吹く風に、すつかり疲れを忘れてしまふ。立ち上つて向をかへ南を見よう。今までの黒い瓦の波にくらべて、之は何といふひろ／＼とし

た眺めであらう。此の峠を界にして北と南のまるでちがった景色もかへつて面白く眺められる。

正面には靈山本宮、宇曾の山々が春霞に包まれて横たはり、その麓にまでひろがつた大分平野を静かに見守つてゐる。生々とした麥の青だゝみの中に、所々にかたまつて森があり、路があり、菜の花の黄色い畑があり、そしてその真中を右上から左下へ斜に大きく曲りながら貫いてゐる一すじの白線、大分川、學校が見える。三ヶ田町、豊饒、畑中、古國府、上村、尼ヶ瀬、見える、見える、私達の住んでゐる町が、村が、今日の前に、静かな姿を見せてゐる。遠

くには水源地の赤瓦が、はつきりと浮き出てゐるし、お宮もお寺も友達の家々の白壁も、青い森の間に指すことが出来る。南をうけて一面にやはらかい陽を浴びて、眠つてゐる様な静かさであるが、ぼんやり見下してゐると、やさしい春のいきづきが感ぜられて、自然にのびのびとした氣持になつてくる。何時の間にか時間がたつてゐる。私はもう一度此の丘の草の上を一廻りして、何か新しくなつた氣持で、大きな呼吸をして下り始めた。眼の下の道を自動車が一臺音もなく消えるやうに春霞の中にとけこんで行つた。

二九、金剛寶戒寺

今は上野にある金剛寶戒寺はもとは印鑰様の近く五町津留と呼ぶ地に聳へてゐた大伽藍で、大日畑門前などいふ名が今も残つてをり、土中から時に古瓦や古い陶器等が出て來たことがあるさうである。

金剛寶戒寺は聖武天皇の御代神龜四年、行基菩薩が命を奉じて建てたお寺で、弘法大師も弘仁の頃おいでになつたといふ。

御本尊は釋迦の立像（高さ七六m）で大

月氏國から來た毘首羯摩がきざみ、約五米位もある觀世音の座像は法橋定朝がきざみ、金剛力士（三八七m）は運慶がきざんだといふ。又金剛寶戒寺の五文字を書いた額は、大納言藤原行成卿の書といはれてゐる。

その昔は境内は三萬坪坊舎の數が六十區、莊田二千餘貫を持つてゐたといふから實に大きなお寺だつたのであらう。しかし度々大水の爲にくづれたので、六代大友貞宗が徳治年中あの上野に移し、舊の様に立派に建てたさうである。

今上野にある御堂は大日如來堂と

いひ中に、前書いた観音座像と金剛力士
とが安置されてゐる。

三〇、南大分の近郊

暖い冬の日南大分近郊の散策に出か
けた。新しくかけられた廣瀬橋を渡つて
瀧尾村へ向ふ。大分川の流れば流石に悠
揚としたものだ。淀むともなく、流るゝと
もなくたゞへた橋のあたりには、船があ
ちらの岸に、こちらの岸に眠つた様に浮
いてゐる。七島蘭は黄色に枯れて春の來
るのを待つてゐる。瀧尾村公民學校を右
に見て東に進むと、やがて百穴の前に立

つ。屏風の様に北をよけた南側の岩壁
の前は全く寒さ知らずだ。右も左も皆
穴ばかりで、なるほど百も穴がありさ
うだ。言ひ傳へによると約二千年か三
千年前に土蜘蛛の住んでゐた穴を後
の世の人が死人を埋める穴にしたの
だと言ひ、又初めからお墓にするため
に掘つたのだとも言つてゐる。私はど
ちらもほんとうらしく思ひながら百
穴を出て碓山へと向つた。瀧尾小學校
の前の道を通つて豊肥線瀧尾驛の南
の方から碓山へ登る。大昔はこの山は
海の中の島であつたさうで、碓島とも
言ひ神武天皇御東征の時、碓を投じ給

ふた處と傳へられてゐる。梅や、櫻や紅葉
が澤山植ゑられた山の上には津守神社
がある。この上から眺めるとすい分景色
がよい。東北の方には今見て來た百穴耕
地整理の立派に出來た田地、西の方には
南大分は勿論、うね／＼と曲つた大分川
南には本宮、靈山、西北には雪をいたゞい
た由布、鶴見、すつと近く大友氏のお城の
あつた高崎山が、庄の原、丸山上野とつゞ
いて手に取る様によく見える。
碓山を下りて東植田村へ入り、しばらく
歩いて國幣中社西寒多神社の森へつ
いた。この神社は昔の豊後一の宮で、西寒
多大神、天照大神、應神天皇、神功皇后、武内

宿彌及その他多数の神々が祀られて
ゐる。前は本宮山の頂上にあつたさう
だが、大友親世(十代)が應永十五年にこ
ゝに遷し奉つたとの事である。こゝを
出て西北の方へとしばらく歩くと高
瀬の石佛がある。この石佛は、元町の石
佛、北海郡の深田の石佛など、共に
大へん立派なものだと言はれてゐる。
どうやらお午近くなつたので、晝食
をすまして賀來の國分寺へと向つた。
せりの植田小學校の前を田原の方へ
行き、小さな橋を渡ると國分寺に着く。
こゝは天平の昔、聖武天皇が諸國に勅
して建立させた國分寺のあつたところ

ろで、大きい礎石が田んぼのそこそこにあるのを見ると、昔の宏大な堂塔や伽藍の様が偲ばれて何となく淋しく感じた。金光明寺と書かれた古い額や佛像や瓦等を見せてもらふ。賀来の市で有名な賀來神社へ参つた。長生をなさつた武内宿彌をお祀りした社だ。毎年九月一日から十一日間お祭でお参りの人は大へん多いが特に七年目毎に行はれる大名行列の年はとてもお参りが多い。昭和八年が行列の年だったので昭和十五年が次の行列年だ。そんな事を思ひながら柞原へと向つた。

久大線賀來驛の東を通り山手を登る。

庄の原を過ぎやがて柞原へ着く。兩側の杉の大木を見上げながら澤山の石段を上り神殿の前に立つ。仲哀天皇、應神天皇、神功皇后の方々をお祀りした國幣小社だ。境内は老木で畫尙暗く、一層神々しくて自然と頭の下るを感じた。

柞原神社を下り富士紡績會社の横を過ぎ電車道に出た時は宵の街頭に電燈の光が美しく輝いてゐた。

三一、南大分の将来

我等の大分が市になつてから二十餘

年、東九州の門戸として非常な発展を遂げて来た。そして今や久大線は全通せんとし、大分港も亦改修が行はれ、名實共に交通の要路となれば、泉都別府をひかへた大分市の今後の発展こそ目覚ましいものがあらう。

將來の大大分市は——市街は東へ延び大分川をはさんで大工場、大商店、銀行、會社が軒を並べて非常な繁華を極めるであらう。それにつれて我が南大分も著しい発展をするのは當然でなければならぬ。

既に都市計畫圖を見ても明礮橋通を八間幅の道路とし、廣瀬橋通との間に大

道路が幾筋も通ずる様になつてゐるから、工場等の設けらるゝにつれて廻遊自動車も電車も通じ交通の便を増すであらう。特に今の三ヶ田町、明礮橋の通りは大分平野西南部の物資供給の町として最も榮えるであらう。

北に山を負ひ南に廣い平野を控へ、大分川の清流を望み、日當りのよい古國府、南太平寺の丘、續きは住宅地として最もよく、きつと住心地のよい綺麗な家が建ち、上野丘から一帯の丘は大公園となり、娯樂場や動物園などが出來て、楽しい一日を送らせるし、すぐ下の大分川は水源地を中心とした櫻

の名所となり、清い流れにそつた堤は花さく春は特によいが、螢とび交ふ五月雨の頃にも、ボートレースや水泳に楽しい三伏の夏にも、月静かな秋の夜にも、或は流れに舟をうかべ、或は釣をたれ等をして市街に住む人の心をなぐさめてくれる場所とならう。

又山北部の發展するにつれては、學校もこの静かな美しい地に移され、立派な學校町が出来上るであらう。そして國司時代の様に文教の中心は南大分となるであらう。

その上大分市十幾萬の市民に給する蔬菜類は大部分この地方に作られる爲、

大きい蔬菜園、又は花卉園などが出来るであらう。

さうなつたら——いや是非さうしなればならぬ、我等の南大分は昔榮えた地だ。幾百年の昔國司の館から續いた町にお寺、お宮等まことに繁榮をほこつてゐたのだ。今より十年二十年の後に文化の精粹をあつめて理想の都市をたて、昔にまさる土地となすのは我等の努力ではあるまいか。

三一、郷土の融和

學校長 高崎吉人

「天津日の光りあまねき眞の愛に睦め諸人
空より高く海より深き愛さ力に手をこり歩め」

これは國民融和の歌の一節であります。我が皇道の精神を現して居るものと思ひます。

今我國が滿洲國を助けて東洋平和のため、力を盡し、支那を始め歐米の國々を相手にして世界の非常時を立て直して行くために一生懸命に努力をして居る根本の精神もこの皇道に基くもので、丁度太陽が光りあまねく照り渡る様な眞の愛を以て

總ての人々を結び合せようご骨折つて居る建國以來動かない我が皇道精神の現はれに外ならないと思ひます。

私共は世界平和國民融和等の大理想を實現する前に先づ手近い郷土の融和團結を考へねばなりません。

美しい春の野に咲くタンポポの花は綿帽子の様な種子となり風に吹かれて數百の小さい落下傘があらこちらに散布され次の春が巡つて來るご其所で芽を出し花を開くのですがよく肥えた土地に落ちた種は幸福で元氣に育ちますがやせた土地や、さらさらの砂の上や、繁つた木の蔭等に落ちた種は苦しい思ひをした上小さくひよろひよろごしか育ちません。岩や瓦の上に落ちた種は根を下す事も出來ないのであります。同じタンポポで元は一つの親から分れたのが種の落ちた場

所によつてこんなに變つて來るのであります。

私共人間として同じ事で生れる家や村で非常に幸ご不幸が別れて來るものであります。皆んな同胞日本人で、一樣に大切な天皇陛下の赤子であります。生れた家や村によつて人々に上や下の區別は無いはずであります。皆んな仲よく手をこり合つて行かねばなりません。

四民平等は日本建國以來の精神で、我大和民族發展の歴史を調べて見ても上に萬代動きなき至高至尊の御皇室を戴き臣民の間には根本から尊いごか賤しいごかの差別はなかつたもので、戰國時代等では力ご才のあるものは家柄や生れた所等は問題でなく誰れでもが武士ごなり大名ごなつたものです。近々二百年の間徳川太平の時代が續くうちに只譯もなく人に上下

の差別や職業に貴賤の區別をつける悪い習慣が何時もなしに
 出来てつまらない分けへだてをして居りましたが、明治大帝
 は維新の始めに當つて我國建國の大精神に歸り舊來の陋習を
 破り天地の公道に基いて四民平等の事を仰せ出されました。本
 當に有難い事であります。

皆さんは此の讀物によつて種々誇るべき郷土の歴史や事柄
 を知つた事と思ひます。實際我が南大分は何でも豊後第一の都
 であつたのです。盛んであつた國府時代の郷土を造り上げたの
 も其の頃皆さんの祖先のお方々が一致團結し融和協同の力で
 大いに努めたお蔭だと思ひます。

私共は再び此の繁榮を實現するため南大分全体の共同一
 致、總ての村と村、人と人が眞の人類愛にめざめて郷土愛のた

めに手を把りあつて凡ての隔てを去り種々な黨派の争を捨て
 打つて一丸とした本當の融和團結の力に依つて郷土の爲に
 盡して行く事を心から望みたいものであります。

昭和九年二月二十日印刷
昭和九年二月廿六日發行

〔非賣品〕

大分市南大分尋常小學校内

編輯者 時 松 木 濤

大分市碩田橋通九二五

印刷者 高 山 通 男

大分市碩田橋通九二五

印刷所 高 山 活 版 社

終

